

# 蘭学事始 杉田玄白著

現代語訳

諏訪邦夫訳

(付 蘭学事始原文)

このファイルはクリエイティブコモンズです。商品化以外の処理はすべて自由です。 諏訪邦夫

現代語訳に原文を付加しました。現代語訳を読んで、原文を読みたくなったという要望があり、きわめてもっともで、私自身の希望とも合致します。ご利用ください。

目次の大項目（頁が書いてある分）と対応する項目の間にリンクをつけました。

## 目次

蘭学事始 現代語訳 I 上之巻..... 2

現代の蘭学ブーム・・・鎖国の歴史の概略を・・・オランダ流外科の系列・・・オランダ語と通詞たち・・・江戸でのオランダ語学習開始・・・オランダ語学習のいろいろ：書籍絶版の例も・・・平賀源内の鬼才ぶり・・・ターヘル・アナトミア登場・・・腑分けをみる・・・決断・・・翻訳にとりかかったものの：フルヘッド・・・  
⊕轡（くつわ）十文字：解らない用語のマーク

[蘭学事始 下之巻](#)..... 14

翻訳が順調に進む楽しさ・・・同僚たちすでになし・・・良沢の大望は・・・草葉の蔭と渾名されたが・・・一ノ関の医師建部清庵との交信と蘭学問答  
翻訳における玄白の態度：基本を教えたい・・・速報版としての「解体約図」  
オランダ通詞の誤解と進歩・・・各種の地ならし：各方面への献本  
蘭学隆盛：第二世代代表大槻玄沢と蘭学階梯・・・その他の同輩たち：荒井庄十部・・・宇田川玄随：漢学から蘭学に転じて内科書翻訳・・・京都の小石元俊・・・大坂の橋本宗吉・・・土浦の山村才助：白石の采覧異言を増訳・・・石井恒右衛門：ハルマ和解への寄与・・・稲村三伯によるハルマ和解・・・第三世代の代表宇田川玄真の紆余曲折・・・私的事業から公けの事業へ・・・蘭学の輪が広がる

[II 蘭学事始原文](#)..... 26

[蘭学事始 上之巻](#)..... 26

[蘭学事始 下之巻](#)..... 37

[訳者あとがき](#)..... 47

## 蘭学事始 現代語訳 I 上之巻

### 現代の蘭学ブーム

昨今、世間に蘭学ということがひろく行われ、真面目な人は熱心に学び、無知でいい加減な人たちはただむやみに恐れ入ったり半可通で吹聴しています。ところでその蘭学の起源をみると、昔、私が仲間たち 二三人がこの仕事にいわば偶然に志を抱いて開始したもので、それからはやくも五十年近く経ちました。ここまで盛んになろうとは到底思わなかったのに、こうなったのは不思議です。

漢学は大昔、遣唐使たちを異国の中国へ遣わし、或は英邁の僧侶が渡来して、直接相手の国の人について学び、帰朝後に貴賤上下へ教導のために行ったので、少しずつ盛んになったのは理解できます。

蘭学では、こんな風に人を相手の国に派遣した例はありません。それなのにこれほど盛んになったのは何故か考えると、医療の場合は教えが大衆への実務を優先する故、それだけ会得しやすかったのでしょう。また、事が新奇なだけに従来と違う妙術もあると世人も考え、さらにはずるがしこい一派がこの名前で、利を図るために流布した面もありそうです。

訳註：「五十年」。玄白はここでも、本書の終わりでも 50 年と述べているが、解体新書翻訳を決断するのが 1771 年でこの蘭学事始を書き終わるのは 1815 だから正確には 44 年である。その前の準備期間も含めて 50 年という意識なのだろう。

「漢学は大昔、遣唐使というものを異朝へ遣わし」。原文には「中古」という単語が入っており、「平安時代」を意味する用語である。しかし、遣唐使の最初は 630 年、遣隋使は 614 年あるいは 600 年までさかのぼり、奈良朝より前である。

外国派遣の問題：明治になってかえって多数の留学生をおくり、外国の教官を招聘しているのはよく知られている通りである。

[諏訪邦夫訳]

### 鎖国の歴史の概略を

昔からの歴史をいろいろ考えと、天正慶長の頃（1573-1591, 1596-1614）、西洋の人がだんだんと日本の西部に船をつけたのは、表向きは交易が名目ですが、蔭には別の欲望もあったようです。故に、その災いが発生してわが国では初めての大事件として、厳禁してしまっただけで、この点はよく知られています。この邪教の問題は、ここでは問題外として議論はしません。但し、その頃の船に乗って来た医者から伝来した外科の流儀は世に残りました。いわゆる南蛮流です。

その前後より、オランダ船も入港を許可され、肥前平戸へ来ていました。外国船がすべて禁止となった時も、オランダには宗教的野心がないとして、引続き渡来を許されました。そこから三十三年目、長崎出島の南蛮人を追放して、その跡へオランダ人を移し、その後は年々長崎の港にオランダ船は入れることになりました。

それが寛永十八年（1641）で、その船でやって来た医師に、またかの国の外科治療法を伝えた者も多く、オランダ流外科と称しています。といっても、横文字の書籍を読んで習い覚えたのではなく、ただその手術を見習い、その薬方を聞き、書き留めただけです。その上、わが国では入手できない薬品も多く、代りの薬で患者を治療しています。

訳註：蔭には別の欲望：キリスト教布教のことを指す。玄白は明示を避けているようだ。  
南蛮：ポルトガルとスペインのこと。

#### オランダ流外科の系列

I. その頃、西流という外科の一家が出来ました。この家系は、当初は南蛮船の通詞西吉兵衛という者で、かの国の医術を伝えて行いましたが、南蛮船の入港が禁止されて後、オランダ通詞となり、そちらの医術も伝え、南蛮流とオランダ流の両方を兼ねて両流と唱え、世間では西流と呼びました。当時は珍しかったので独占的に行はれ、その名も高く後には官医に召し出され、改名して玄甫先生と称したそうです。その息子の宗春は身体がよわく早死して家が絶えたそうです。この人が、私の祖父甫仙翁の先生です。その後召し出された今の玄哲君の祖父玄哲先生は、玄甫先生の姪の縁者だそうです。玄甫先生は、初めて西洋医流を唱え、公儀でも取り立てられ、オランダ医療が公けに採用された最初です。

I. 一方、栗崎流というのは、南蛮人の子孫だそうです。南蛮邪宗の人たちが厳禁となり、その船の渡来も禁制となった時、平戸と長崎の地にかの人々雑居し、日本で妻を持ち、子を作った人がいました。

この点もその後詮索され、蛮人（ポルトガル人）の子孫は残らず外国へ追放されましたが、そのうち栗崎氏で名はドウという人は、外国で成長したものの改宗せず、医事を学んだだけで邪宗ではないとして許されて帰国しました。長崎へ帰った後、その術を利用して流行ってなかなか上手で、これを人々が栗崎流と称したそうです。名のドウは、オランダ語で露の事ですが、後に文字を加えてドウウ（道有）と呼び直しました。それが今の官医栗崎君の祖なのか、あるいは別家の栗崎かは、詳しいことは不明です。吉田流、檜林流などの流儀は、元来オランダ通詞がオランダの方法を学び、一門を開いたものです。

I. 桂川家は、今から五代前の祖で甫筑先生という方が、6代将軍家宣が未だ甲府藩主だった際に藩邸に召し出された外科医でした。この甫筑先生は平戸侯の医師で嵐山甫安という方で、平戸藩主が出島在館のオランダ外科に甫安を託して学ばせたそうです。平戸藩主の家は、オランダ船が平戸へ入港するようになって以来、かの国の人と特に親しくしていたようです。

当時は、今のように厳しくもなく、甫筑君はその頃若い年齢で門人となり、師の嵐山甫安に付添って出島にも時々参上し、嵐山独特の流儀を習ったということです。オランダの外科医は、ダンネルとアルマンズという人だそうです。

桂川家は、もとは大和の国の人で森島氏でしたが、嵐山の流を汲むという意味で家名を桂川と改めました。今の桂川君の祖父甫三氏は、私が若かった時に交際が厚かったので、こ

んな話を聞いていました。これが、世に桂川流と称するものです。

また古来カスバル流という外科医がいました。これは寛永二十年、南部山田浦へ漂着したオランダ船の乗組員で江戸へ召喚された中に、カスバルという外科医がいて、三四年江戸に留め置かれ、周囲にその療法を教え、その後長崎へ移動させられたそうです。江戸や長崎でも、正保（1644-48）の頃、このカスバル伝来の療法があり、詳しい事はわかりませんが、後にカスバル流と唱えたのでしょう。もっとも、別にカスバル姓の外科医師が渡来したとの話もあります。

この他長崎で吉雄流というのは、その後渡来の蘭人から伝わった療法に吉雄流とつけました。諸家の伝書を見ると、みな膏薬油薬の法だけで委しいことは書いてありません。

以上はすべて不完全なものながら、それでも漢方の外科よりずっと優れ、また本邦に昔から伝わっていた外科治療よりもはるかに勝っていました。

その中で私が見たのに、檜林家の金瘡の書があて切傷を治療するものです。その中に、人体にはセイヌンというものがあり、生命をあづかる大切のものがあります。今から考えるとセーニューのことで、「神経」と義訳したもののようです。わづかながら、この程度のことを聞き出せたのはこの書が初めです。

#### オランダ語と通詞たち

I. 徳川の当初、西洋関係についてはいろいろありましたが、すべて厳しく禁止されました。渡来が許可されたオランダ関係も、彼らが使う横書きの文字の読み書きは禁止され、通詞の人たちも片仮名で書き留めるだけで、口から口へ記憶して通訳の用を足し、それが長年のやり方でした。それで、横書きの文字を読み習おうという人は誰一人いませんでした。ところが、どんなことも時期がくれば、自ら開けるといふものです。

八代將軍吉宗公の時、長崎のオランダ通詞西善三郎、吉雄幸左衛門、今一人何某（名は忘れた）の三人が申し合せて議論し、以下の結論を出しました。

「これまで通詞の家で一切の御用を取扱ってきたが、オランダ文字を知らず、ただ暗記の言葉だけで通訳し、複雑な数多い用事をなんとか果たして勤めているのは、あまりに頼りない。せめて自分たちだけでも横文字を習い、かの国の書物も読む免許を受けたい。そうすれば、以後は万事につけて事情が明白になり、用事を果たしやすはずだ。今のやり方ではあの国の人に偽り欺かれても、これを糾明する方法もない。」

そう考えて、三人で言葉を合わせて申し立て、どうぞ免許を許可して欲しいと、公に願い出ました。これが至極尤もな願いとして聞き届けられ、早速許可されました。オランダ船の渡来から百年余で、横文字を学ぶことの初めです。

#### 江戸でのオランダ語学習開始

I. こうして文字を習い覚えることが出来、西善三郎らは先づコンストウワールドという辞書をオランダ人より借りて、三通りまで写しました。オランダ人がこの精力に感心し、その書を直に西氏に与えたそうです。

こんな事実が自然に上層部にも達し、それではオランダ語の書籍をみたことがないから、何でもいいから一冊差し出すようにと命令が下りました。そこで、何だったか、図入りの本差し出したところ、御覧になって、これは図だけでも実に精密だ、書いてあることの内容を読めるなら、必ず委しい有用なことがあるはずだ、江戸でも誰か学んでおくのが当然と、初めて医師野呂元丈老と儒者青木文蔵（昆陽）の二人に命じて学ばせたということです。

それで、この二人はオランダ語の学習を心がけましたが、なにしろ毎春一度拝礼に来るオランダ人に付添って来る通訳たちから僅かの滞留中聞くだけで、それも忙しくて十分な暇はとれず、たっぷり学習もできません。数年経っても、ソン（日）、マーン（月）、ステルレ（星）、ヘーメル（天）、アールド（地）、メンス（人）、ダラーカ（竜）、ティゲル（虎）、ブロイムボーム（梅）、バムブース（竹）という単語と、例の二十五字を書き習っただけです。そうはいつでも、これこそ江戸でオランダとその言葉を学び初めた発端でした。

I. さて、私の友人に豊前中津侯の医官で前野良沢という人がいました。この人は幼少の頃に孤児となり、その伯父で淀侯の医師宮田全沢という人に養われて成人しました。

全沢は博学の人でしたが天性奇人で、好みが他の人と異り、良沢を教育したやり方も異常でした。全沢の教えとして、人は世に廃れそうな芸能は習っておいて後々まで絶えないようにしろ、だから人が捨ててやらないことを身に着けて、世のためにそれが残るようにすべきと教えたそうです。良沢も、実際にもこの教えに従ったのですから天性の奇人でした。主に医業を励み東洞流漢方を勤め、遊芸でも世にすたった一世切りを稽古してその秘曲を極め、また滑稽なことに猿若狂言の会があると聞くと、この稽古にも通いました。このように奇を好む性だったからこそ、青木君の門に入ってオランダ文字や単語なども習ったのです。

後に彼が書いた蘭訳筌という書物を見ると、青木氏に入門するより以前のことだったようですが、同藩の坂江鷗という隠士が、ある日蘭書の1頁を良沢に見せ、これを読んで理解できるかと訊いたそうです。良沢はこれを借り受けてつらつら考えて、国が違えば言葉も違うというが、同じ人間の行うことだからできないはずはないと一生懸命になったものの、手掛かりが何もないのでまったく残念と悔やんだそうです。それから、たまたま青木先生がこの領域に通じていると聞いて、遂にその門に入って学び、オランダ文字略考などという著書を受け取り、先生の学び識っているところはすべて聞き尽したそうです。

筌：本来は漁業の用語だが、ここでは「全書」というような意味か。[諏訪邦夫訳]

この話は、青木先生が長崎から帰京した後のことで、青木先生は延享（1744-1748）の頃に長崎へ行ったらしいので、良沢の入門は宝暦（1751-1764）の末か明和（1764-1772）の初年、年齢は四十歳を過ぎていたはずで、官職にないふつうの医師がオランダ語を学んだ最初の例だったようです。

オランダ語学習のいろいろ：書籍絶版の例も

I. とはいうものの、その頃はふつうの人が勝手に横文字を取扱うのは遠慮していました。その頃本草家と呼ばれていた後藤梨春という男が、オランダ関係の事柄を見聞して書き集め、紅毛談という仮名書の小冊を著して開板しました。その中に例の二十五文字を彫り入れたところ、どこかから咎めを受けて、絶板にされました。

I. またその後のある時、山形侯の医師安富寄碩という者が麴町に住み、彼が長崎に遊学して二十五文字を習い、その文字でいろは四十七文字を綴ったのを書いて貰って帰り、人に自慢して、書籍も読んで理解できるようにいい触らしたのを、私も珍しいと思った記憶があります。私と同じ小浜藩の中川淳庵は麴町に町宅があり、この男からオランダ文字を初めて習ったようです。

I. 私は、良沢がオランダ関係の問題を究めようとの意志があるとは当時は知りませんでした。昔のことで年月は忘れましたが、明和の初年（1764）頃だったか、ある年の春、恒例の如く蘭人が江戸へ来た時に、良沢が私の家にやって来ました。何方へ行くのだと尋ねると、今日は蘭人の宿泊所に参り、通訳に逢ってオランダのことを聞き、模様によっては蘭語のこと尋ねてみたいといいます。当時の私は若くて血気盛んで、何事もすぐ熱を入れやすかったので、どうぞ私も連れて行って下さい、一緒に尋ねてみたいというと、それは簡単といって同道してかの宿泊所に出かけました。

その年の通訳の大將は西善三郎というものが出てきました。良沢が引合せて、オランダ語を学びたいと申し述べたところ、善三郎氏はこれを聞いて、それは絶対に無理といいません。

何故かという、かの言葉を習って理解するというのは至極難しい、例えば湯水か酒を呑むのを何というか質問しようとする際、最初は手真似で質問するより外にやりようがない、酒をのむということを質問するには、先づ茶碗でも持ち添へ注ぐ真似をして口につけて、これはと質問すると、相手もわかってデリンキと教えてくれる、即ち呑むことです。

さて、上戸と下戸とを質問するには、手真似で質問できるやり方がない、大量に呑むと少し呑むで、一応差別できるが、沢山呑んでも酒を好きでない人もあり、少ししか呑まないが好きな人もいる。こうなると、感情の問題になって表現できない。

一方、その好き嗜むということはアーンテレッケンという。私は通訳の家に生れ、幼時よりそのことに馴れているのに、その単語の意味が何だということがわからなかった。五十歳にもなって、この度の道中でその意味が始めてわかった。アーンとはもともと「向う」ということ、テレッケンとは引くことです。その向うを引くとは、向うのものを手前へ引き寄せる意味である。酒を好む上戸といえ、向うの物を手前へ引きたく思う、即ち好むの意である。また故郷を思うにも同じ単語を使いますが、やはり故郷を手元へ引きよせたいと思う意味である。

かの言語を習得することはこんな風に面倒で、私のように常にオランダ人に接していても容易に納得し難い。ただ江戸に居て学ぼうと思っても不可能である。それ故に野呂・青

木両先生など、御用で年々この客館へいらっしゃり、頑張って精進されているが、いっこうに進歩しない。

あたたがたも、無理という点は同じですと意見されました。

良沢はどう思ったか知りませんが、私は生まれつき気短かで、この説明をなるほどと感じ、そんな面倒なことをなし遂げる根気はない、いたずらに日月を費すは無益と思い、学ぶ気持をなくして帰りました。

訳註：この話は 1764 頃で、その後解体新書の翻訳に手をつけるのは 1771 年ですから、7 年ほどさかのぼります。玄白は 1733 年生まれですから、この時点で 30 歳を超えたばかりです。[諏訪邦夫訳]

I. その頃より、世の中でかのオランダ由来のものを何となく奇珍として、舶来の珍器の類をいろいろ好み、少しでも新し物好きな人は、多くも少くも取り衆めて常に愛でるようになりました。ことに相良侯田沼意次氏が執政の頃で、世の中は華美繁花の最中でしたから、オランダからウエールガラス（天気験器）、テルモメートル（寒暖験器）、ドンドルガラス（震雷験器）、ホクトメートル（水液軽重、清濁験器）、ドンクルカームル（暗室写真鏡）、トーフランターレン（現妖鏡）、ゾンガラス（観目玉）、ループル（呼遠筒）などという類の種々の器物を年々到来し、その上に種々の時計、千里鏡、硝子細工物の類など数知れません。

人々は細工の巧みさに感心し、その窮理の微妙さに感服し、毎春拝礼するオランダ人が在府中は、その宿泊所に自然に多数の人々が集まるようになりました。いづれの年か忘れましたが、明和四年か五年、甲此丹（カピタン：商館長）はヤン・カランス、外科医はバブルというものが来ていました。このカランスは博学の人で、バブルは外科巧者だそうです。

大通詞吉雄幸左衛門は、主にこのバブルを師としたそうです。幸左衛門（後、幸作、号は耕牛となった）は、外科の腕が優れた人として有名で、西国中国筋の人で長崎まで出かけて彼の門に入る者も数多くいました。この年もオランダ人に附添って来た。私は伝え聞いていたので、早速幸左衛門の門に入り、その術を学びに毎日例の宿泊所へ通いました。

ある日、上記バブル氏が、川原元伯という医師の舌疳を診て治療し、瀉血の術を施行するのを見学しました。目覚ましい手練の業です。血の飛び出す場所を予め考え、これを受ける器を少し引きはなし置いてあったところ、飛び散る血は丁度その中へ跳びこみました。これが江戸での瀉血のはじめです。その頃、私は年若で元気もあり、彼らの滞留中は真面目に宿泊所に出かけていたところ、幸左衛門が一珍書を出してきました。去年初めて到来した、ヘイステル（人名）のシュルゼイン（外科治療術）という書だそうです。自分が是非欲しいと懇望して、境産の酒二十樽で買い取ったと話しました。

開いて見ると、書いてあることは一字一行も読めないものの、図を見ると和漢の書とは趣きがまったく異り、図の精妙な点だけでも目が覚める気がしました。そこで暫くその書ばかり受け、せめて図だけでもと、昼夜かけて写して在留中に終了しました。この仕事で徹

夜して明け方の鶏鳴を聞いたこともありました。

注：瀉血：原文は「刺絡」とあり、こちらは漢方医学の用語である。ここで行った「瀉血」は、血をふかせて病気をなおす古い西洋のやり方を言う。行うことはほぼ同じだが、考え方は少し違う。

I. 年は忘れましたが、ある正月、例の幸左衛門がオランダ人に附添って参府した頃、豊前中津邸で昌鹿公の御母君御座敷内で不慮に御脛を折傷しました。えらい人なので大騒ぎで、かれこれ医師を招いたところ、幸いに吉雄幸左衛門が在京していて、直ちに招いて療治を命じて無事快癒しました。この時、前野良沢は中津藩の医師なので対診と説明を命じられ、格別懇意となりました。こんな事件が、蘭学が世に広まるきっかけの一つでした。

良沢はその後、主君の供で中津へ行った際、主君に願い出て長崎の地へ出かけて百日ばかり滞在し、主に吉雄、榎林等に従って昼夜懸命に蘭語を習い、先に青木先生より学んでいた類語と題した本の単語類を本として復習訂正し、さらにこれに加え補ってそれでも僅か七百余言を習得しました。その際、オランダ語の字体文章等などもいろいろと聞き書きして持ち帰りました。さらにこの時、蘭書も少し入手して帰京しました。つまり、長崎へは外科治療の勉強というより、オランダ語の読み書きを学び書籍を入手しようと出かけたので、そうした人のはじめです。

#### 平賀源内の鬼才ぶり

I. 医術以外にも、オランダは他の技芸にも精しいと世に少しずつ知られ、何となく人気が出てきました。この頃より、主に官医で志ある方々は対話ということをお願い出て例の宿泊所へゆき、治療法や薬のことを聞きました。また天文家関係者も、その家業のことを質問しました。

当時は、その人々の門人なら同道も自由でした。そこで、門人という名目で私も出入していました。長崎は法が厳しくて、旅館への出入はなかなか許されませんでした。江戸は短期間なので、取締りもゆるやかでした。

当時、平賀源内という浪人者がおり、本職は本草家ですが、生れつき頭がよくて人気を集めていました。何時だったか、上にいったカランスという甲比丹（カピタン：商館長）が参向の時、例の宿泊所に人が集まって酒宴を開いていたところ、源内もその座に列なっていました。カランスが戯れに一つの金袋を出し、この口を何とか開いてごらん、開いた人に差し上げるといいました。その口は智恵の輪です。周囲の客たちが次々と手にとって、いろいろ工夫しましたが、誰も開けられません。末席にいた源内に回ると、源内は手に取って暫く考えて、たちまち口を開いてしまいました。一座の客はもちろん、当のカランスも源内の敏捷な才に感心して、早速その袋を源内に与えました。それ以来二人は親密になり、源内は度々宿泊所に行って、物産の事などを質問したそうです。

またある日、カランスが基石のような形のスランガステーン（蛇石）という物を出して見せました。源内がこれを見て功用を聞くと、すぐ翌日自分で新しい別の物を持参してカラ



ンスに見せました。カランスはこれを見て、前日見せた物と同じだといいます。

源内が、昨日見せていただいたのは貴国の物産か、または外国で求めたものかと質問すると、カランスは印度の地方則意蘭（セイロン）というところで求めたと答えました。源内がさらに質問して、その国ではどんなところで産するかというと、カランスの答えは、その国での話では、この物は大蛇の頭の中から出る石だといいます。源内はこれを聞いて、それは違う、これは竜骨で作ったものだと言いました。それを聞くと、カランスは、竜などは世に存在しないのに、竜の骨で作れるはずはない、と詰問しました。源内の説明は、自分の故郷である讃州（香川県）小豆島から出土した大きな竜歯と竜骨を示して、これが即ち竜骨で、本草綱目という漢土の書に、蛇は皮を換へ、竜は骨を換える述べていると説明し、自分の示すところのスランガステーンはこの竜骨で作った物だと説明しました。つまり、恐竜の化石とその付属物です。

カランスはこれを聞いて驚いて、益々源内の奇才に感服しました。そこで源内のいう本草綱目を求め、右の竜骨を源内より貰うけて帰りました。返礼としてヨンストンスの禽獣譜、ドドニュースの生植本草、アンボイスの貝譜などという蒐集家の欲しがる書物を贈ったそうです。

これらのことも、直接の対話で話しあったのではなく、附添っていた内通詞部屋附などが、その大意を通じて話したことで、一字一言通訳したわけではありません。その後、源内は長崎へ遊学し、蘭書・蘭器などを求め、さらにエレキテルという不思議な装置を手に入れて帰京し、その機械をいろいろ工夫して、世間の人を驚かしたことでした。

I. この辺の事柄がこんな具合に進行し、それで西洋のことに通じたわけでもありません。しかし、何となくオランダの問題に遠慮する風潮もなくなりました。蘭書なんか所持するのは御免という気分も消え、時には所持する人もいる風俗になりました。私の小浜藩の仲間の医師の中川淳庵は本草を深く好み、オランダ物産の学にも嗜好があり、田村藍水、同西湖先生などとも同志で、毎春参向してくるオランダの通訳の人とも往来しました。

#### ターヘル・アナトミア登場

明和八年辛卯(1771)の春と記憶していますが、中川淳庵が例の宿泊所へ行き、オランダ人がターヘル・アナトミアとカスバリウス・アナトミアという身体内景図説の書二本を取り出して、希望者に譲ろうというのを持ち帰って、私に見せました。もちろん一字も読めませんが、臓腑、骨節などの描写が見事でこれまで見聞したのとはまったく異り、きっと実際に解剖して描いたものと感じ、是非欲しいと思いました。そもそもわが家はオランダ流の外科を唱える身でもあり、せめて書棚に備えて置きたいのです。しかし、当時の我が家は貧しく、これを購入する力がなかったので、藩の太夫である岡新左衛門という人の許に持って行って、こんなわけで是非この蘭書が欲しい、入手したいのだが手元不如意で残念と話すと、新左衛門がこれを聞いて、それは入手しておいて役に立つものか、役に立つものならお殿様に費用を出して貰うよう取計うといいます。私は、必ずこんな風に役立つという目当はないけれども、将来きっと役立つに相違ないと考えるので見てほしいと答えました。傍に倉小左衛門（後に青野と改む）という男が居て、それはなんとか調べ

てみよう、杉田氏はこれをムダにする人ではないと助言してくれました。これにより、容易に願いが叶い、望みとおりに入手できました。私が蘭書を手に入れた最初でした。

I. さて、それまで平賀源内などと語り合っ、いろいろ見聞して、オランダの測定法や物理学などは驚き入ることが多く、もしこうした図書の内容を理解して解釈できるなら、きっと格別の利益が得られるはず、しかしこれまでそこを志す人がないのは残念で、何とかこれを切り開く道はないだろうか、江戸では到底ダメでも、長崎の通訳に頼んで判読して貰いたいものだ、一冊でも翻訳という仕事が完成すれば、大変な国益とも成るはずだ、けどなあ……と力の及ばない点を毎度嘆息していました。しかし、この慨嘆は決してむなしく終わらなかったのです。

### 腑分けをみる

I. その頃、この解剖書を入手したので、先づその図を実物に照して見たいと考えるようになりました。

まさに、それを学ぶ時がきたというべきか、何とも不思議なめぐり合わせです。三月三日の夜、時の町奉行 曲淵甲斐守殿の家士 得能万兵衛という男から手紙がきて、明日お抱え医師の何某という者が、千住骨ヶ原で解剖を行うから、希望ならこちらへ来て欲しいと知らせてきました。同僚の小杉玄適氏は、以前京都で山脇東洋先生の門で学び、山脇先生の企画した解剖に参加しており、先生について実際に視てみると、昔の人の話は全部うそで信じるわけにはいかないと前から述べていました。昔は9臓と称し、その後は5臓6腑と分けているが、それがそもそも杜撰さの証拠だそうです。

東洋先生は、すでに蔵志という著書も出版していました。私はこの書も見えており、機会があれば自分でも解剖を是非みたいと思っていました。たまたまオランダの解剖書も手に入ったことでもあり、照合して何とかその実否を確認したいと考え、この誘いを喜んで格別の幸運だと早速でかけるつもりでうきうきしました。ところでこんな幸運は独り占めすべきではないと、仲間たちで関心の深そうな人々に知らせるつもりで、先づ同僚中川淳庵を初め誰彼と知らせた中で、例の良沢にも知らせました。

良沢は私より年齢が十歳ほど上で自分より老輩です。知り合いでしたが、通常は交流も稀で直接交渉は乏しかったのですが、医学の問題に熱心なことは互いに知っており、腑分けから漏らすわけにはいきません。早速知らせたいのに時間がさしせまり、しかもオランダ人が滞留中で、夜になってしまいました。急に知らせる便もなく、どうしようかと考えて、臨時の思い付きで、明朝これこれがあり、お望みなら早朝に浅草三谷町出口の茶屋まで御越し下さい、私もそこでお待ちしますと書いて、とりあえず手紙を書き、知った人と相談して本石町の木戸際に居た辻駕の者を雇って、置いてこいと命じました。

I. 翌朝支度を整えて約束の場所へ行くと良沢も来ており、他の仲間も皆集まって出迎えました。そこで良沢が蘭書を一冊懐中からとり出し、開き示しながら、これはターヘル・アナトミアというオランダの解剖書で、先年長崎へ行った時に手に入れて、家にしまっておいたと言います。見ると、私がつい最近手に入れた蘭書とまさに同書同版です。これこ

そ奇遇だと、互いに手を打って感嘆し合いました。

しかも良沢は、長崎遊学の際に、その地で習ったとあって、本を開いて、これはロングとあって肺のこと、こちらはハルトとあって心臓のこと、マーグというのは胃で、ミルトとあって脾臓だと指して教えてくれました。どれも漢説の図とはまったく違い、誰もがとにかく直接見ないうちとはと、心中で疑いをもっていました。

I. そこから参加者が連れ立って骨ヶ原の解剖の場に到着しました。解剖は、えたの虎松というものが巧みで以前から約束してあり、この日もその虎松が担当することになっていましたが、たまたま虎松は急に病気になり、その祖父だという屠者で年齢九十歳の老人が、代理として登場しました。元気な老人でした。彼は、若い頃より解剖を度々手がけて、数人を解剖したと話しました。これ迄は、解剖自体はえたに任せ、彼が各々の場所をさして肺だとか肝臓だとか、腎だとか教えて切り分けたものを示していたそうです。

視た人々はそのま眺めて、見物人は直接は内部を見究めることはしなかったそうです。もちろん臓腑に名前が書いてあるわけではなく、屠者の指し示すのを視て信用していたわけで、それが当時の慣例でした。その日も、例の老屠があれだとかこれだとか指し示し、心、肝、胆、胃の外にその名のなきものをさして、これは名は知らないけれど、自分は若い頃から数人を手にかけて解剖しており、誰れの腹内にもここにはこんな物があり、あそこにはあんな物があると示して見せました。書籍の図から考えて後に明かになった血脈の二幹(大動脈と大静脈)と小腎(副腎)などでした。老屠がさらに言うには、今まで解剖のたびにその医師の人たちに品々を示したけれど、誰一人これが何、あれは何々と疑った人はなかったそうです。

一方、良沢と私は手にしているオランダ書の図に照らし合せて、その図に少しも違いがないと確認しました。古来医経の説明では、肺は六葉両耳、肝は左三葉右四葉に分かれているというのに、そんな分葉はなく、腸や胃の位置も形状も古説とはまったく異っていました。

注:「えた」、「屠者」:解剖を担当する人について登場する単語である。人間でも動物でも、屍体をあつかう仕事はふつうの人でなくて、特殊階級の人に割り当てられていた。「えた」や「屠者」はそういう人たちのこと。

官医岡田養仙老、藤本立泉老などはその頃まで七八度も解剖に立ち会った由で、従来の説と違っているのが、毎度不思議に思っていたそうです。その度毎に異常と見たものを写して、中国人と西洋人で違いがあるのかと書いてある本を見たこともあると理由をつけていたようです。さて、その日の解剖は終り、ついでに骸骨の形も見ておこうと、刑場に野ざらしになっている骨を拾って眺めると、これも旧説と違い、オランダ書の図に合致して、ますます驚嘆するばかりでした。

その日解剖の対象となった屍体は五十歳ばかりの老婦で、大罪を犯した者だそうです。もとは京都生れで、あだ名を青茶婆と呼ばれていたとのことでした。

## 決断

I. 帰路は、良沢、淳庵と私と、三人同行です。途中で語り合いながら、さてさて今日の実験にはまったく驚いた、これまで気付かなかったのは恥ずかしい、いやしくも医師として主君に仕える身で、その医術の基本である人間の形態の本当の姿を知らず、今まで毎日この仕事を勤めて来たのは面目ない次第だ、どうか今日のこの実験に基づき、大体でも身体の真理を知って医療を行えば、この仕事で身を立てる申訳もたつだろうと、共々嘆息しました。

良沢も、まったくその通りで自分も同感だと述べた。

その時、私はこう述べました。何とかしてこのターヘル・アナトミアの一部を新たに翻訳すれば、身体内外のことがわかり、今後の治療に役立つだろう、何とかして通訳等の手を取りず、読んでいきたいとの発言でした。これに対して良沢が言うには、自分は年来蘭書を読みたいという宿願を抱いていたが、同じ考えの良友がなく、常々その点を嘆きながら日を送ってきた、参加者の方々が是非読みたいという強く望まれるなら、自分は先年長崎へもゆき、蘭語も少々は知っているから、それを核として、一緒に何とか読もうではないかといいます。それを聞くと淳庵と私は、それは何とも嬉しい、皆で力を合わせて、是非頑張って読んで行こうと答えました。

良沢はこれを聞くと本当に大喜びしました。それなら善はいそげという諺もあるから、早速明日私宅へいらして欲しい、何とか工夫しようと深く約束して、その日は参加者それぞれの宿所へと帰りました。

## 翻訳にとりかかったものの：フルヘッヘンド

I. その翌日、良沢の家に集まり、前日のことを語り合い、先づ、かのターヘル・アナトミアの書に向けたものの、いわば艫も舵もない船で大海に乗り出したようなもので、茫洋として頼るべき根拠が何もなく、ただあきれて居るだけです。とはいうものの、良沢はかねてからこの問題を心にかけ、長崎まで行き、蘭語や章句語釈の問題のことも少しは聞き覚えて習ってもおり、年齢も私よりは十歳ほど年長の老輩だから、とにかく彼を盟主と定め、先生とも仰ぐことにしました。

一方かくいう私は、基本の二十五字さえまだ知らず、急に思い立ったことで、何とかしてかろうじて文字を覚え、他のいろいろな単語も習いました。

I. さてこの書を読みはじめるに際して、どうやって文章にしていこうかと話し合いました。はじめから身体の内部のことはとてもわかりにくいだろう、本の冒頭部分に、身体の前部と後面の全体図があって、これは体表面です。これなら、名前はみなわかっているから、この図と説明の符号を照らし合せて考えるのなら、取付きやすいはずで、本の最初の図でもあり、みんなで先づここからスタートして翻訳を開始しようと決めました。解体新書形体名目篇というのがこれです。

その頃はデ (de) とか、ヘット (het) とか、またアルス (als)、ウエルケ (welke) 等の助詞の類さえ、何が何やら気持の上で明確には解釈できず、たとえ少しだけ覚えている単語があっても、前後が一向にわからないことだらけでした。例えば、眉 (ウエインブラ

一ウ) というのは目の上に生えた毛だという一句もぼんやりしかわからず、長い春の一日かけても明確にならず、日暮れまで考へ詰め、互いににらみ合って、僅か一二寸ばかりの文章、一行も解釈できなかつたりしました。

或る日、鼻のところで、フルヘッヘンドしているものとあるのをみて、この単語がわかりません。これは何を意味するのだと考え合ったものの、どうもなりません。その頃ウヲールデンブック(辞書)はなく、良沢が長崎で入手したオランダ語の簡略なパンフレットがありそれを探すと、フルヘッヘンドの説明に、木の枝を断ちると跡がフルヘッヘンドとなり、また庭を掃除すると塵土が集まってフルヘッヘンドするなど書いてありました。どんな意味だろうか、また例の如くこじつけ考え合うものの判断が付きません。この時、私の意見で、本の枝を断った跡が治癒するとうずたかくなる、また掃除して塵土が集まるとこれもうずたかくなる、鼻は顔の真ん中で堆起しているから、フルヘッヘンドは堆(ウツタカシ)ということだろう、この単語は「堆」と訳してはどうだろうという、参加者はこの提案を聞いて、それは素晴らしい、堆(ウツタカシ)と訳せばあてはまると決定しました。その時の嬉しさといったら、何に譬えようか、連城の玉を得たというか、とんでもない宝物を手に入れた気持でした。

#### ⊕轡(くつわ)十文字：解らない用語のマーク

こんな風に推理しては訳語を定めていきました。次第に解釈できる単語の数も増し、良沢がすでに知っていた訳語集を増補しました。その中にも、シンネン(精神)などいう単語が出でくると、何とも解釈できないのもありました。こういうのは後でわかるまでとりあえず符号を付けて置こうと、丸の中に十文字を書いておき、この符号のつく「わからないこと」を、轡(くつわ)十文字と名づけた。毎回いろいろに申し合せ、いくら考えても解らないことがあって、その苦しさの余りに、それもまた轡十文字、これもまた轡十文字となりました。そういいながら、仕事を進めるのはもちろん人で、成功不成功は天運との喩で辛苦しました。

一ヶ月に六七回の割合で、こんな風に頭をつかい、根をつめて仕事を進めました。定例の日には誰もサボらず、わけもなくして参加者と相集まり会議して読み合って、わからないことも繰り返すとわかると言うとおりで、一年も過ぎた頃には訳語もかなり増加し、読むにつれてかの国の事態も自然と了解でき、そうなると難しい言葉の少ないところは、一日に十行も、あるいはもっと多くも、格別の労苦なく解釈できるようになりました。一方で、毎年はじめに江戸にくる通訳の人たちに尋ねて確認したこともありました。その間にも、さらに解剖を観察したこともあり、動物を解剖して図と照らし合わせたことも何回もありました。

連城の玉：非常に貴重なものを指す語。中国の故事による。

轡十文字：轡は、馬具の一つで口にはめて手綱をつける。轡十文字は、丸に十の字は島津藩の紋所だという。⊕がそう。[諏訪邦夫訳]

## 蘭学事始 下之巻

翻訳が順調に進む楽しさ

I. この会の業務を怠らずに勤めていると、次第に同じ興味を抱く人たちの参加者が増えてきましたが、各自考えがいろいろで一様ではありません。

私は偶然この解剖書を手に入れ、直ちに実際の解剖で確認し、東西千古の差があると知って驚いて心服し、書物の内容をなんとか早く解明して、治療の実用に役立て、世の医家の仕事に一日も早く一部でも役立たせたいという気持ちで、他に望みはありません。それで、一日の会合で解釈できた分はその夜翻訳して草稿にし、その際に訳述の仕方を種々考え直しました。こうして四年の間に、草稿は十一度書き換え板下に渡せるまでになり、遂に解体新書翻訳の事業が完成しました。

そもそも江戸でこの学を創業して、腑分と言ひ古した用語を新たに「解体」と訳し直し、また仲間の誰がいうともなく蘭学という新名を提唱し、日本全国に自然と広まって通称となりました。現在の隆盛のきっかけです。今から考えると、これまで二百年間、外科法は伝わったものの、直接オランダの医書を訳すことはなく、この時の私たちの初めての仕事が、不思議にも医道の根本である解剖書で、それが新訳の起点となったのは、偶然ながら実に天意です。

I. 昔をふりかえると、新書が完成する前に、こんな風に努力勉勵を二、三年続けて、その状況がわかるに随い、さとうきびを囓むが如く、次第にその甘味に喰いつき、これで千古の誤も解け、その基本がたしかに理解できるのが楽しく、集会の日は前日から夜の明けのを待ちかね、子供がお祭に出かけるような気持でした。

そもそも当時の江戸には華やかさに浮かれる風俗もあり、他の人も私たちの話を聞き伝えて、雷同して仲間入りするものもありました。その時の人々を思うと、最後までいた人も途中で脱落した人も、今は皆あの世にいます。嶺春泰、烏山松円などは本当によく出席してくれましたが、今はもう世を去っています。

同僚たちすでになし

同僚中川淳庵も、解体新書出版までは元気でしたが、五十歳を前に世を去りました。そのころ往来した者で今も生き残っているのは、私よりはるか歳下で、弘前の医官桐山正哲だけです。当時、仕事の順調な進行を知るものは別として、知らないものは成果を怪しんで完成を疑う人も少なくありませんでした。

集った人の中にも、仕事がかばかしく進まず、結果がみえない面倒さに、遂に精魂尽き果て、あるいはその日の生計に追われて成果の見えないのに倦き、あるいは已むを得ず中道で脱退した人も数多くいました。志の強いのに多病で、結局成果を覗ずに早世した人も多くいます。最初より会合に出ていた桂川甫周君は、天性穎敏、逸群の才で、かの文辞章句を理解する点で他の誰より早く、しかも若年で、仲間も末頼もしいと賞嘆していました。家は代々オランダ流外科の官医で、父の甫三君は青木先生よりアベセ二十五字をはじめ、僅かながらも蘭語を聞き覚え、下地もあった故でしょう。退屈の様子もなく、会には

必ず出席してくれました。

I. 同盟の人々は毎回こんな風に寄り集まって仕事を進めましたが、目標は必ずしも一様ではありません。まあ、人の気持として当然です。

良沢の大望は

先づ第一の盟主の良沢ですが、彼は奇異の才で、この学を以て終身の業とし、このオランダ語に完璧に通曉し、その力で西洋の状況を知り、本という本は何でも読んでしまおうとの大望を抱き、狙いは康熙字典の如きウヲールデンブック（辞書）の解釈に意欲を燃やしていました。故に、浮かれた世間との交わりを好みませんでした。

この学問を切開く条件で天の助けは、良沢が天性多病と称して、この頃よりは常にじっと家にいて外出せず、むやみに人と交際もせず、この仕事だけを唯一の楽しみとして日を過ごした点があります。主君の昌鹿公も、良沢のこの態度と気持ちをよく承知し、彼は元來変わり者と咎めませんでした。本務を怠って勤務がいい加減だとの告げ口もありましたが、主君は「毎日の仕事を勤めるのも大事だが、一方で別の仕事に力を注ぎ、終には天下後世の人たちに有益なことをするのも、仕事を一生懸命に勤めていると同じだ。良沢はやりたいことがあるのだから、やりたいようにやらせるのがいい」と、それ以上は介入せず放置したそうです。

主君はその頃ポイセン（人名）著のプラクテーキという内科書を手に入れ、その紙端に御印章を押して、良沢に与えていたそうです。良沢は、元來樂山と号しましたが、高齢になって自ら蘭化とも称しています。昔、主君より頂いた名で、良沢はオランダ人の化身だとふざけて主君が述べたことから出た名前です。ともあれ、良沢に対する主君の寵遇はこれほど厚く、だからこそ良沢は心のままに学の修行が出来ました。

単に付和雷同して参加した人も数多くいて、完成の遠い点に飽きて脱落するものも少なくなかったのに、この良沢先生に関する限り、生涯一日のごとく、確乎として動じず、じっとその態度を貫いて仕事を遂げると周囲も信じました。これこそ、まさに「解体新書」完成に至った根源です。

中川淳庵は博物学が好みで、この仕事が完成したら次に海外の物産関係を調査したいと望んでいました。また一方で面白い装置や技術面も好きで、自分でも工夫を凝らして新製したものも少なくありません。オランダ局方を訳していましたが、完成する前に天明の初年膈症（かくしょう）を患って亡くなりました。

訳註：

膈症：食物が通らなくなる病気、食道がんや胃がんなどのことか。[諏訪邦夫訳]

桂川君の場合、明かな目標はなかったのに、前にも述べた家柄から、とになく何とはなくこの仕事を好み、齢は若いし、根気は強く、会毎に来てこの仕事に加わってくれました。

### 草葉の蔭と渾名されたが

私は他の方々とは違い、始めて解剖で内臓を眺めてオランダの解剖書の図に照らして従来の絵とはまったく違う点に驚き、何としてもこの一事を早く明らかにし、さらには世の医療の役にも立てたいという希望が強く、一日も早く本書の一部でも世に出したいと心掛けて翻訳に力を尽くし、それ以外に望みはないと決めてその点に集中しました。したがって、本書に必要な単語などを覚えるのが一杯で、他の事に関与する望みはありませんでした。五色の糸の乱れは皆美しいが、赤とか黄とか一色に決め、他はみな切り棄てる気持で進みました。

当時、こう考えました。応神帝の時代に百済の王仁が初めて書籍を持って渡来して漢字を伝えて以来、代々の天子が異国へ学生を派遣して書を学ばせ、数千年後の今になってようやく漢人にも恥ぢない漢学が出来るまでになりました。オランダの事柄は今はじめたばかりで、すぐ完成して完璧に成就する道理はないではないか、と。

だからこそ、人体の構造を明らかにして、これまでの千年間言われた解答が実は違うと世に示し、基本問題を知らせたいと思いました。他に望みはないと決心し、前にもいった通り、一日の会合で判明したことをその夜宿に帰って直に翻訳して記述しました。仲間の人たちが、私が性急だと時々笑うのに対し、私の解答は「凡そ男子たるもの、草木と共に朽ちてはいけない。諸君は身体が強く年齢も若いですが、私は多病で歳も進んでいる。やがてこの仕事が完成した時、立ち会えないかも知れない。人の死生は預め定められない」と主張しました。

そもそも、「人より先に行を起すものは人を制し、後れて手をつけるものは人に制せられる」とも指摘しました。だからこそ、私は急ぎたいのです。諸君が大成する日には私は地下の人となって、草葉の蔭で見守りましょうと答えたので、桂川君などは大いに笑って、私を草葉の蔭という渾名で呼んでいました。

こうして年月が過ぎ行き、白駒の隙が過ぎるよりも早く月日が過ぎて三年、四年の月日を重ね、しだいに世の人にも伝え聞いて尋ねて来るも出てきました。私たちも、西洋が説く臟腑、経絡、骨節等既にわかったことの基本を話して聞かせられるまでになりました。

訳註：「経絡」は東洋医学の概念だから、「西洋が説く・・・・・・」で著者が何を意図しているのかはわからない。前後関係からは「末梢神経系統」を指すと解釈できよう。

### 一ノ関の医師建部清庵との交信と蘭学問答

I. 解体新書を出版する前、奥州一ノ関の医師建部清庵（由正）という人が、私の名を聞き伝えて、平生から記して置いた疑問を送ってきました。その手紙に書いてあった点で、医療の面から感嘆することも多く、これまで互いに識ってもおらず、距離も離れているのに、気が合いました。手紙には、これまでのオランダ流外科は片仮名書きの伝書を基礎としているのは残念で、世に有識の人が出現して昔漢土で仏経を翻訳したように、オランダの書も翻訳すれば、正真のオランダ医流が成就するはず、と書いてあります。その時より二十余年前の考えだそうです。実にその見識には感心するものが多く、はからずも彼に遭



遇して私も喜び、われらの知己千載の一奇遇と返事を書き、往復の書信がいろいろあり、その因縁でさらにいろいろな情報を交換したので、門人達がこの手紙をあつめて、蘭学問答と名づけました。

後に子弟らが版木にして、オランダ医事問答という標題をつけたのがこれです。

翻訳における玄白の態度：基本を教えたい

I. 私は元来おおざっぱな人間で学問も乏しく、オランダ学説を翻訳しても、読者がそれをどんどん理解し解釈するのを助ける力はありません。しかし、人に頼んだのでは自分の意図も通じないので、やむをえず無知も顧みずに自分で書き綴りました。だからこそ、細かい面では知識や認識が不足して見苦しい面もあり、精密で微妙な意味もありそうと思いつながら解釈できず、いい加減とは知りながら、強いて解釈しないで放置し、意味のわかったところだけを書きました。

たとえば京に上る場合、東海道と東山道の二道あることを知って、西へ西へと行けば、終には京に上り着きます。そんな基本の道筋を教えるのが重要と思い、大体の基本を書いたわけです。その手初めとして、世の医師の為に翻訳を開始したのです。元来学問不足の自分だから翻訳の仕方は知らず、ましてオランダ書の翻訳となれば、例のない仕事で、読み初めたばかりで、細密な判読できません。しかし何度もくりかえすように、医師たるもの先づ第一に臓器の構造やその形や働きを知らないでは済まず、是非その意味を知らせて、診療の助けにしてほしいというのが狙いです。

意図がそうだから、訳をいそいで早くその大筋を人の耳にも留まり理解し易くして、従来の医書に比較して異なる点を速かにさとらせるのを第一としました。それ故、従来の漢字で表現する旧名を用いて訳したいと思いました。ところが、漢字の名とオランダ語の名とは一致しないものも多く、方針が決まらずに当惑しました。あれこれ考え合せ、自分にも初めてで、とにかくわかりやすいことを狙おうと決し、時に翻訳、時に対訳、時に直訳、時に義訳と、さまざまに工夫しました。義訳とは意味から単語をつくること、直訳とはオランダ語をそのままカナ表記することをいいます。とにかく、ああ書いたりこう書いたりして、昼夜自分で書き直し、前にもいったように草稿は十一度書き換え、四年かけてようやく完成しました。

その時点では、オランダの風俗の細かい面、微妙な点などは今ほど明らかではありませんでした。ですから、いろいろと判明した現時点から見ると、誤解が多いかもしれません。しかし、物事を最初に唱える時は、後からそしりを受けるのを恐れては何も出来ません。くりかえしますが、基本にもとづいて合点できた点を訳出したのです。経典の梵語からの漢訳も、四十二章経から始まってようやく現在の一切経に達しました。このやり方が、私の当初よりの希望であり、願いです。

良沢という人がいなかったら、この道は到底開けなかったでしょう。しかし、一方で私のように基本に忠実だがおおまかな人間がいなければ、この道がこれほど速かには開けられなかったでしょう。この組み合わせも、天の助です。

速報版としての「解体約図」

I. さて、このように一通りの訳書は出来ましたが、当時は蘭説ということをしりも聞いたり知っている人は誰もいません。そこへいきなり「解体新書」を世に出しても、漢方医学になじんだ人は、オランダ医学の真髓がわからず、とんでもない間違った説と驚き怪んで、誰も読まないかもしれないと危惧しました。そこで、先づ「解体約図」というものを版木にして先に出版しました。世間でいう速報版のようなものです。

#### オランダ通詞の誤解と進歩

この仕事が江戸ではじまり二三年も過ぎたころ、蘭学が江戸で大いに開けているようだ、毎年年初に参向するオランダ人一行らが長崎に伝え、通訳たちは嫌ったり憎んだりしたそうです。それはそうでしょう。なにしろ、当時は、かの人々は会話を通訳するだけで、書物を読んで翻訳などしなかった時代で、冷めしをさむめしといい、一部一篇と訳すべきエーンドールという語を、一のわかれ二のわかれと変な日本語に直し、通じればけっこうで事を済ませていました。そもそも身体の内側の様子など、誰一人知る人はいません。或る通詞が「約図」を見て、ゲール（乳糜リンパ管）というものは身体にはない、ガルの誤でガルなら胆のことと問題にしたそうです。そうはいうものの、私たちが関東で翻訳という仕事を開始したので、オランダ問題の本拠たる長崎の通訳たちの意欲も大いに強まったということでした。

#### 各種の地ならし：各方面への献本

I. 「解体約図」が先に完成し、ついで本篇の「解体新書」も出版されましたが、紅毛談さえ絶版になった前例があり、西洋のことはかりそめにも唱えてはならぬと言われると困ります。オランダは別格として貰えるかも不明瞭で、差支えないと判定されると断定もできません。秘密出版扱いされて、禁令を犯したとして罪を受ける可能性も否定できず、この問題は重大な恐怖でした。

横文字をそのまま出したのではなく、読めば内容は明確で、医道解明のためだから差支えないと自分で判断して、初めての翻訳を公にすると唱おうと、覚悟を極めて決断しました。

といっても、何しろ翻訳出版としては最初で、何とか神の庇護を受けたく、一部を公儀へ献本しました。幸い仲間の桂川甫周君の父上の桂川甫三君が旧友で、彼の判断をきいたところ、彼が取扱って推挙して御奥から将軍に献上してくれました。それで特に問題も生じずに済んだのは、幸いでした。

次に私の従弟の吉村辰碩が京都に住んでおり、彼の推挙で関白九条家と近衛准后内前公と広橋家へも一部ずつ献上しました。これによって、三家より目出度き古歌を自ら書いたものを頂戴し、また東坊城家よりは七言絶句の詩を賦して頂戴しました。また時の大小御老中方へも同じく一部ずつ進呈しました。こちらは何の障害もなく経過しました。こうして安堵して、オランダ翻訳書がいよいよ公けになりました。

#### 蘭学隆盛：第二世代代表大槻玄沢と蘭学階梯

I. この学問が現在のように盛んになり、これほど普及するとは当時の私は思い及ばず、この点は自分の非才と先見の明の乏しさを恥じます。今になって考えると、漢学は文章を飾

るので普及に時間がかかったが、蘭学は事実を言葉でありのまま記すので、受け取りやすかったのでしょうか。あるいは、漢学で人の知識が十分開けた後に蘭学が登場したので受け取られやすかったのかも知れません。ともあれ、この仕事が自然に開く気運はあったのでしょう。

前に記した東奥の建部氏は私より二十歳ばかり年長者で、手紙の往復があり、私の解答で実に嬉しいと言ってきて、建部氏自身はすでに高齢でどうしようもないかと、その息子の亮策をわが門に入れ、さらに門人の大槻玄沢という男を上京させて同じくわが門に入れました。

大槻玄沢の天性は、凡そ物を学ぶこと、何をするにも実地を踏んではじめて行動し、納得してはじめて口に出すなどの点が実に徹底して見事でした。気性は激しくはないものの、いい加減なことを好まず、生来オランダの科学向きの才人です。

私はこの玄沢の人と才とを愛して務めて誘導し、後には直接に良沢翁にも依頼してそちらの仕事を学ばせました。果して彼は勉強怠らず、良沢も彼の人を知って学問の真髓を伝授したので、程なくかの書を解する方法の基本を体得しました。さらに、同僚淳庵、桂川法眼、福知山侯などと往来してこの学問を研究しました。その上に志を大きくして、是非西遊して長崎に行き直接にその通訳家に従って学び、各方面のことを身につけたいといいます。

自分も良沢も喜んで許し、「君は若くて元気がいいのだから是非行きたまえ、そうして勉強したまえ、そうした経験を積めば仕事はますます進むはず」と脇から督励しました。そこで彼は、奮起して志を高くもって出立しました。もちろん、貧しい若者ですから、力の及ばない点もありました。私自身も、その志に感じて何とか助けたいと思うものの、自分自身の生計が不如意で思うようにはできず、それでも力の及ぶ限りは助け、さらには蘭学仲間の福知山侯もいろいろと恩遇して下さり、やがてかの地に到着して、本木栄之進という通訳家に寄宿して教えを受け、いろいろな人と会って勉強して、油断なく修行して帰京しました。その後は、東北に戻らず江戸に永住しています。

大槻玄沢氏には嘗て編集しておいた蘭学階梯という本があり、帰京後に出版して同志に示しました。この書が出版されると、世間で志のある人たちがこれを見て新たに発奮し、志を興した人も少なくないようです。自分とすれば、この人を世に出し、この書も世に出て、自分の希望と意志を天が助けたことの一つだと思っています。

蘭学階梯：蘭学の意義・歴史とオランダ語の基本と文法とを解説したものという。

その他の同輩たち：荒井庄十部

I. わが門に出入したもののうち、この仕事を学んだものが数多くいましたが、人によっては久しく都下に足をとどめることができず、官途につながれた人、生計に逐われた人、病身や夭死で屯坐した人など、仕事を見事に完成させた人は少数です。とは言いながら、私が発起したことにより、その支派分流を生じたものは多数います。

たとえば、安永（1772-1781）七八年の頃、荒井庄十部という男が長崎から平賀源内のと

ころにやってきました。彼れは西善三郎の元の養子で、政九郎といって通訳を仕事としていた人です。この仲間で蘭学を興す最初の人なので、私は自宅へ招いて淳庵などと共にサーメンスプラーク（会話）を習ったこともあります。源内の死後は桂川家に寄食し、その業を助け、また福知山侯へも出入して侯の地理学にも力を加えました。侯は特に地理学を好み、泰西図説等の訳編があります。庄十郎は、後に他家に移動して森平右衛門と改名しました。この人は江戸へきて、いろいろと仲間を誘発したようです。でも、今は昔の人となってしまいました。

宇田川玄随：漢学から蘭学に転じて内科書翻訳

I. 津山侯の藩医に宇田川玄随という男がいました。元来漢学に詳しく、博覧強記の人です。彼が蘭学に志し、玄沢からオランダ語を習い、その紹介で私と淳庵とも往来し、桂川君、良沢とも交流しました。後に長崎の通訳で、白河侯の家臣となった石井恒右衛門という人とも交流し、その言語の数々も習い、元来秀才の上根気も強い人で仕事が大いに進み、一書を訳し、内科撰要という標題の十八巻を著述しました。簡約の書ですが、本邦内科書新訳のはじめです。惜しいかな四十歳余で亡くなりました。この書は、彼の没後にやっと全部が出版されました。

京都の小石元俊

I. 京都に小石元俊という医師がいます。独嘯庵の門人で、医事に志が深い男です。私は特に識らない人でした。彼は最初に解体新書を読んで千古の説に違う個所を疑い、何度も自分で解剖を観察して本書が正確な点に感心し、爾来それを深く喜び、私に手紙を書いて、解釈困難なところを尋問してきました。天明（1781-1789）五年の秋、私が主君にしたがって小浜入りした帰路に京都に滞留すると、やって来て日夜議論しました。その後は江戸へきて、玄沢の住まいに同居して一年ほど在留し、つねづね仲間たちと討論しました。蘭学自体は学びませんでしたが、帰京後は塾で出入の諸生徒に解体新書をつねに講義して意義を強調したそうです。関西の人を誘発した例の一つです。

大坂の橋本宗吉

I. 大坂に橋本宗吉という男がいます。傘屋の紋を描くことを仕事に老親を養い、生業としていたそうです。特別の学問はないのに才能があり、土地の豪商が力を添えて、江戸へ送って玄沢の門に入れました。僅かな逗留の間に頑張って大いに学び、帰坂の後も自ら勉めてその仕事を進め、後に医師となって業を唱へ、交流する人も多く、さらには訳書も著しました。五畿、七道、山陽、南海道の人を誘導し、今ではますます盛んと聞いています。江戸へ来たのは寛政の初年でした。帰坂の最初の頃は、上に書いた元俊も、宗吉を助けて仕事を励ましたそうです。

訳註：

五畿：大和（奈良県）・山城（京都府南部）・河内・和泉（大阪府）・摂津（兵庫県南部）の5カ国を指す。

七道：東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道の総称。だから、本文に「七道」に山陽、南海道と加えてあるのは、理屈ではおかしい。[諏訪邦夫訳]

土浦の山村才助：白石の采覧異言を増訳

I. 土浦侯の藩士に山村才助という奇人がいます。叔父の市川小左衛門を介して私に蘭学のことを質問してきました。私は、当時すでに年老いて、この面の仕事をすべて門人玄沢に託していました。この男も玄沢に入門させた。玄沢は例の国文二十五字から開始して教えました。彼には天性の才が備わって、殊に地理学をこのみ、専らその筋を力を注いでいましたが、白石先生の采覧異言を増訳重訂して十三巻の書を訳撰し、栗山先生の推挙で官にも献上しました。その上に、翻訳の内旨も受けましたが、その仕事を完成せずに世を去り、惜しむべき才能を失いました。万国輿地（世界地理）は、中国人の知らない点が多く、蘭学の優位な点の一つです。

石井恒右衛門：ハルマ和解への寄与

I. 石井恒右衛門は長崎の訳官で馬田清吉と名乗っていましたが、家業を人に譲って江戸へ来て、天明（1781-1789）の中頃に白河侯の家臣になりました。侯は彼の前歴を知って、ドドニュース本草を翻訳させて十数巻の訳説が完成しました。その仕事を完成しないで、彼も亡くなりました。稲村三伯が行ったハルマ和解はもっぱらこの人の力によるものです。この訳書は、近来初学稽古の人々が考閲するのに有益だそうです。この人は元の職業で仕官しようと東下したのではないのに、蘭学がこれほど隆盛の中へ来て、専らこの道を助けることになりました。

I. 桂川家のことは前にも述べたとおりです。甫周君は抜群の俊才で、オランダのこと全般に通じて名声は四方に広がり、その業事の趣きは常に公儀にも知られて召されたほどで、時々西洋筋のことで翻訳も命じられました。草稿が家に有るはずですが、オランダ薬撰、海上備要方などという訳説の著書があると聞いていますが、完成した書は見ていません。六十歳にならずに、世を去ったのが残念です。

コメント：桂川甫周と「北槎聞略」：大黒屋光太夫といえ、太平洋で難破してアリューシャンまで流され、その後ロシア本土をペテルスブルクまで移動してエカテリーナ女王に謁見するなど、1783年～92年の9年間外国生活を送った後に帰国した人です。この人の事績を、井上靖や吉村昭が小説に描く際の情報源としたものに「北槎聞略」があり、桂川甫周が大黒屋光太夫に面接して聴き取った事柄の記録で、原文は岩波文庫で読めます。電子テキストもあり、現代語訳もあります（<http://www7a.biglobe.ne.jp/~katatumuri/daikoku/>）[諏訪邦夫訳註]

稲村三伯によるハルマ和解

I. 因州侯の医師で稲村三伯という男がいます。国（因州：因幡、鳥取県東部）にいる時、

蘭学階梯を見て発憤して江戸へきて、玄沢の門に入ってこの仕事を学び、後にハルマという人が書いた辞書を石井恒右衛門と共同して訳をつけ、十三巻という和語解説の書を編纂しました。それがハルマ和解です。はじめ玄沢が石井へ仲介し、原書も借し与えたそうです。その初稿は宇田川玄随、岡田甫説などが加勢して、時々石井と往来して完成したそうです。訂正の際に、他に力を添えた人もいます。その後、故あって侯邸を退き、近国海上郡の辺に浪遊し、遂に名を随鷗と改め、京都に住んで主にこの仕事を唱えたそうです。今は彼も亡くなったと聞きました。しかし辞書を完成させたのは、初学者のために大きな功績です。

### 第三世代の代表宇田川玄真の紆余曲折

I. 今の宇田川玄真は元来は伊勢の安岡氏で、京都生れです。江戸へ出で岡田氏に寄寓し、上にいう宇田川玄随の漢学の弟子でした。玄随は、彼が才能豊かで頼りになると知って蘭学に向かわせようと、玄沢とも話し合いました。ところが玄随があるとき、主君に従ってお国に戻った頃、養家を辞して本姓の安岡に戻りました。そこではじめて、玄真は師命を含んで玄沢の許に来て、蘭学学習の希望を述べました。蘭字の書方までは玄随に習っていたので、蘭言訳語の一小冊を授けて写させ、例の局方の書を読ませました。日々往来し、さらに寄食のことを望みましたが、そのころ家に差し障りがあり、しばらくは仲間の嶺春泰の許に委託しました。

ところが、その春泰の病気が日に日に重くなり、終に亡くなりました。そこで玄沢は、甫周君に相談して彼の所へ委託して、この男は蘭学を学びたがっているが、頼るところがなく残念で、取り立てればきっと仕事の助けとなると説きました。甫周君は承諾して、これより同家に入塾しました。その後も、玄沢のとも往来してしばしば訳法を質問していました。この男、蘭学の実際に心酔して、自分は他に望むところは何もない、随意にこの業の修行出来る師塾なら何方へも寄宿したいというので、桂川家へ託したわけです。ところが、当時の桂川家は官務と治業と繁多で、自分の希望に合わないと言いつつ訴えていました。ある時、玄沢がこれを私に語りました。

私自身の当時は次第に専門の医療業務が忙しく、素業を勤むべき暇もない身でした。もちろん、この道への志は深く、自分でもこの道を究めたいという意志は強くありました。解体新書成就の後も、ヘイステル外科書の訳文に手をかけ、金瘡瘡瘍の諸篇は数巻分の原稿は出来ましたが、その頃たびたび病に罹り、周囲からの諫めもあり、この仕事に根をつめすぎている祟りだから、しばらく止めろといわれました。

玄沢等も、私に対してとにかく気持を広くもって療養に専念すべきで、そちらのお仕事は不肖ながら自分が代るといいます。実際、私は次第に老い行く身で、大業を完成させる根気もなく、その後は今のところ中絶しています。でも、本来の気持ちは已みがたく、数年の間考えていた蘭書は大部の物でも、力の及ぶだけは高価なものも敢えて購入し、ある程度は蔵書も集まっています。この学問に進みたい人で、志がありながら書籍が乏しいと進みにくいので、自ら読む暇はなくとも、子弟で志のある人に借し与えて役立てようと考えて、数十巻を蔵していました。

こうしたものを年若くこの道に強い意志を持つ人にゆずりたい、できればこういう人に、私の娘の一人を娶せて養子とし、この業を遂げさせ、自分の医道で解決していない領域、不足な個所などを解決して、諸君たちの苦しみを救いたいと考えました。

ちょうどそこに玄真が登場したので、彼をその候補者として、早速その意志を訊くと、彼の望みは玄沢の言う通りでした。そこで私の家に迎え、父子の契りを結びました。玄真もその意図を喜び、わが家の蔵書を自在に使い、日夜怠らず学び、勉学のほどはややもすれば夜を徹することもありました。精根こめて務めたので進歩も速く、その実績は昔日の何倍にも達しました。私も大変に喜びました。ところが、当時は若くもあり頑張りすぎるが移り気で血気盛んの最中で、ついには放蕩に走り、しばしば意見しましたがますます激しくなって歯止めが利かなくなりました。そこで、惜しむべき才能の持ち主とは知りながら、捨て置くとは何を仕出かすか配で、主君の御名を汚すとも懸念し、自分も安心できないので、やむを得ず離縁絶交せざるを得ませんでした。

I. これによって仲間も交流を絶ち、彼も頼むところの少い身となって困窮するようになり、とはいうものの好きな仕事は廃めないで、例の稲村氏などがひそかに貢いだようです。その際稲村等は、私の息子の伯元（実子ではなく養子）に内々頼んで、蔵書中の内科12部の書を訳させてその窮を凌がせたと後で聞きました。遂には身を清めて志を改めました。その頃、稲村三伯が企てたハルマ和解という本は、かれが力を加えてその業を助成したものです。

I. 二三年過ぎて後、宇田川玄随が病気で亡くなりました。子がないので養子を求めたところ稲村氏が仲立ちして、玄真に宇田川家を継がせました。玄随とは元来縁もあり、その人が亡くなった後も、その亡父の志を継ぎ、自分も志す本来の望みを達したわけです。その後ますます精進して数多くの訳説を出し、医範の提綱という書籍を出版し、一家として大成しました。

行いも改まり、志も立派に立って宇田川姓も継いだので、私とも交流をゆるして欲しいと、伯元も玄沢も言うので、いつまでも憎み続けて遠ざけておくのは不当と出入りを許し、もとの如く互いに親しみ、玄真も私に師父のように仕え、私も彼を子どものように見る昔の状態に戻りました。

蘭学の歴史において、良沢や私を第一世代、甫周や玄沢を第二世代とすると、玄真は次の第三世代の代表格です。

（コメント：現代と比較すると、このように優秀な若者を養子に迎えることが、以前の日本では頻回に行われていたようです。明治以降でも、たとえば斎藤茂吉の例もあります。「家」を重視した結果でしょう。[諏訪邦夫訳註]）

訳註：『舎密開宗』について

宇田川玄随の養子が宇田川玄真ですが、その宇田川玄真の養子に宇田川榕菴(1798-1846)という人がいます。この人も蘭学の達人で大量の翻訳を行っており、特に重要なものとし

て『舎密開宗』という訳書があり、1837年から死後の1847年にかけて出版され、全部で700頁ほどの巨大な本です。日本の化学の最初の教科書とされ、化学用語のかなりの部分をこの宇田川榕菴氏が作成していると書いてあります。原本は、イギリス人 William Henry (1774 - 1836) の“Elements of Experimental Chemistry”の本のドイツ語訳→オランダ語訳からの重訳です。この Henry は、「気体が溶媒の物理的に溶ける場合の溶解量は、気体の分圧に比例する」つまり「ヘンリーの法則」を発見したあのヘンリー氏です。英語の原書は700頁以上あって、公開されています。また『舎密開宗』もスキャンした絵の状態のものを、名古屋の中村学園が公開しています。書籍のスタイルでは、田中実氏が翻訳と校注を付して出版しています（舎密開宗—復刻と現代語訳・注 講談社、1975、19500円）。重量が3kgを超える巨大な本ですが、図書館で一応みることは可能でした。

なお、宇田川榕菴氏は勉強家で、『舎密開宗』は上記の英書の単純な翻訳に留まらず、その他の情報が加わっているとされています。

#### 私的事業から公けの事業へ

I. 玄沢は若くして有名になり、近頃中央政府から幕府が所蔵するオランダ書を新たに翻訳するよう命令を受けました。「蕃書和解御用」です。昔、私が仲間たちとかりそめに企てた学業が、私が世にあるうちにこんな華やかな命を受けるまで発展するとは身に余る光栄で、一生の願いがかなって満足です。最初は、何とか人々の広済のためと思い立ち、この難しい事業に努力を重ねましたが、最終的に報いられた気持です。続いで玄真も同様の命を受け、玄沢と一緒にこれに従事することになって感激です。他でもない私が誘導した一門の子弟たちがこの事業に参加するわけで、年老いた身の本懐としてこれ以上はありません。私自身が高齢まで元気でいられる寿命もありがたく、以前は草葉の蔭と揮名されたわが身が、今なお現世で仕事の発展を見せてもらうのは、限りなき恩光、旻天の冥感ともいべきです。

I. この他、玄沢、玄随、玄真の門から出で出藍の誉れの高い人たちもいるようで、私からみると孫や曾孫のようなもので、委しくわかりません。江戸・大坂・京都の三都以外に、諸侯の国々に住んでいる人も多いことでしょう。

#### 蘭学の輪が広がる

I. 昔、西幸三郎がマーリンの辞書を全部翻訳しようと長崎で企てましたが、手をつけただけで完成しませんでした。明和安永（1764-1781）の頃には、本木栄之進という人がいて、天文暦説の訳書が一つ二つある由です。その他は聞いていません。この人の弟子に志築忠次郎という翻訳の得意な人がおり、病気がちなので若いうちに職を辞して他へゆづり、本姓の中野に戻って隠退して、病を理由に世人との交通を絶ち、ひとり学んで蘭書をよく読みふけり、その中でオランダ語の文法を解明したといひます。文化年間の初め、吉雄六次郎、馬場千之助などという人が彼の門に入って、オランダ語の品詞や文章構造の基本を学んで伝えたそうです。



この千之助が今は佐十郎（貞由）と改名し、先年臨時の御用で江戸に召し出されて数年在留し、当時御家人に召し出されて、結局江戸に永住し、専ら蘭書翻訳の御用を勤め、希望者に読み方を教えました。自分の弟子や孫弟子もその教えを受け、彼らが正確な解釈法を身に着けて正しい翻訳法も完成するでしょう。

そうすると、忠次郎は本邦オランダ通詞という大きな系列の中核だったに違いありません。若しこの人が隠退せず在職のままだったら、却ってここまで到達できなかったのではないのでしょうか。この点、もしかすると江戸で私どものような仲間や師友もなくて、もっぱらオランダの書物ばかり読んで習得したので、かえって発奮したのかも知れません。これも国内が長く平和だからで、こんな仕事が世に広がる気運といえます。

コメント：蘭学事始は、「解体新書が最初の翻訳書」という立場をとっているが、先行する翻訳書が長崎を中心に何冊も出ているという意見も有力である。本木栄之進（良永）は、コペルニクスの地動説を紹介している由。また、上巻で八代将軍吉宗の時代に西善三郎、吉雄幸左衛門と共にオランダ語の正規の学習を願い出た3人目（その個所では氏名不詳となっている）は、この本木栄之進と結論されている。

「江戸での出版だから広まった」というのは現代でもみられる現象で、それと共通しているだろう。[諏訪邦夫訳]

I. 一滴の油を広い池にたらすと、それが散って池全体に及びます。前野良沢、中川淳庵、私の三人が申し合わせ、かりそめに思いついた仕事が、五十年近い歳月を経て、日本中に広まり、毎年訳説の本も出ています。「一犬虚を吠ゆれば万犬実を伝う」という言葉は、一人が嘘をいうと廻りがそれを真実として伝えるというデタラメですが、蘭学はその逆で「一犬実を吠ゆれば万犬虚を吠ゆる」で、はじめに真実から出発したからその後も真実の道は失われません。もちろん、翻訳書の中には良いものも悪いものもあるでしょうが、それは一応問題の外におきましょう。これだけ長生きすると、今日のような隆盛を見聞して、喜んだり驚いたりです。現在この領域の仕事をする人で、これまでのことを種々に聞き伝え語り伝えを誤る人も多そうなので、あとさきながら覚えて居た事柄をこんな風に書きました。

かえすがえすも、実に嬉しいことです。この道が開ければ百年後千年後の医家は真理を得て、人々の救済に役立つに違いないと踊りだしたい気持ちです。私は幸い長命で、自分の知る蘭学を開いた初めから、今の隆盛まで実見できて、身に備わった幸いです。ゆっくり考えれば、何よりも世の中が太平だからです。世に篤好厚志の人があっても、戦乱で騒がしい社会では学業を創建し、隆盛に導く余裕はとうてい望めません。

恐れ多いことながら、ことし文化十二年乙亥（1815）は、家康公が亡くなって二百年目にあたります。公が天下太平を成し遂げたお蔭で、私のような末端の人間までが仕事ができありがたいことです。

[4月にこれを記録して大槻玄沢氏に贈りました。私はもう老い疲れて、今後こんな長文

を書けそうもありません。生きているうちの絶筆と考えて綴りました。前後反転してわかりにくい点など訂正して書き直して、わが子孫たちに見せて欲しいものです。]

八十三齡、九幸翁、思いつくままに記したものです。

蘭学事始 下之巻 終

### 蘭学事始原文

蘭学事始の原文です。現代語訳を読まれて、原文に接したいとお考えの方がいらっしゃるかと推測して、ファイルに加えます。

原文テキストは、岩波文庫・酒井女史のものなどから選んであります。

基本的に原文通りですが、特に読みにくそうな文字をカナに置き換えてあります。ほんの一部だけ、ルビを残し注釈も加えました。《》で囲ってある単語がそれです。

また原文は、個々のパラグラフが極端に長い個所もあるので、そこでは改行を加えて、個々のパラグラフを短くしました。さらに、読点を少し増やしました。私の現代語訳に気づいた方はご連絡いただければさいわいです。

諏訪邦夫 kunio.suwa@nifty.com

蘭学事始 杉田玄白著

=====

### 蘭学事始 上之巻

今時、世間に蘭学といふこと専ら行はれ、志を立つる人は篤く学び、無識なる者はみだりにこれを誇張す。その初めをかえりみ思ふに、昔、翁が輩《はらから》二三人、ふとこの業に志を興せしことなるが、はや五十年に近し。今頃かくまでに至るべしとはつゆ思はざりしに、不思議にも盛んになりしことなり。漢学は中古、遣唐使といふものを異朝へ遣はされ、或は英邁の僧侶などを渡され、ただちにかの国の人に従ひ学ばせ、帰朝の後貴賤上下へ教導のためになし給ひしことなれば、ようやく盛んになりしは尤ものことなり。この蘭学ばかりはさよふのことにもあらず。しかるにかく成り行きしはいかにと思ふに、それ医家のことはその数へかたすべて集に就くを以て先とすることうゆゑ、却って領解すること速かなるか、または事の新奇にして異方妙術もあることのやうに世人も覚え居ることゆゑ、奸猾の徒、これを名として、名を釣り利を射るために流布するものなるか。

つらつら古今の形勢を考ふるに、天正慶長の頃、西洋の人漸々わが西部に船を渡せしは、陽には交易によせ、陰には欲するところありてなるべし。故にその災ひ起りしを国初以来甚だ厳禁なし給へりと思えたり。これ世に知るところなり。その邪教のことは知らざるところの他事なれば論なし。但し、その頃の船に乗り来りし医者の伝来を受けたる外科の流法は世に残れるもあり。これ世に南蛮流とはいふなり。その前後より和蘭船は御免ありて、肥前平戸へ船を寄せぬ。異船御禁止になりし頃も、この国はその党類にはあらざる次第あ

りて、引続き渡来を許させ給ひぬ。それより三十三ヶ年目にて、長崎出島の南蛮人を逐ひ  
 払ひて、その跡へ居を移せしよし。それよりは年々長崎の津に船を来たすこととはなりぬ。

これは寛永十八年のことなるよし。その後、その船に随従し来れる医師に、またかの外  
 治の療法を伝へし者も多しとなり。これを和蘭流外科とは称するなり。これもとより横文  
 字の書籍を読み習ひ覚えしことにはあらず、たゞその手術を見習ひ、その薬方を聞き、  
 書き留めたるまでなり。尤も、こなたになきところの薬品多ければ、代葉がちにてぞ病者  
 も取扱ひしことと知らる。

一、その頃西流といふ外科の一家出来たり。この家は、その初め南蛮船の通詞西吉兵衛と  
 いへる者にて、かの国の医術を伝へ、人に施せしが、その船の入津禁止せられて後、また  
 和蘭通詞となり、その国の医術も伝はり、この人南蛮和蘭両流を相兼ねしとて、その両流  
 と唱へしを、世には西流と呼びしよし。

その頃は至って珍しきことにてありければ専ら行はれ、その名も高かりしゆゑにや、後  
 には官医に召し出され、改名して玄甫先生と申せしよし。その男宗春と申されしは多病に  
 て早世し給ひ、家絶えしとなり。これわが祖甫仙翁の師家なり。その後召し出されし今の  
 玄哲君の祖父玄哲先生は、玄甫先生の姪の続きなりとなり。右の玄甫先生、初めて西洋医  
 流を唱へられしより、公儀にも御用ひ遊ばされしことにて、和蘭医事御用に立ちし初めな  
 り。

一、また栗崎流といへるは、南蛮人の種子なりと。これは南蛮邪宗の徒厳禁となり、そ  
 の船の渡海も御禁制となりたれども、以前は平戸長崎の地にかの人々雑居し、妻を持ち、  
 子も有りしが、後々これをも吟味ありて、蛮人の種子の分は残らずこの地を放流せられし  
 が、そのうち栗崎氏にて名はドウといふものは、かの地に成長してもその宗には入らず、  
 その国の医事を学びしが、邪宗に入らざる訳を以て帰朝を許され召し歸され、長崎へ歸り  
 し後、その術を以て大に行はれ、至って上手なりしが、人々栗崎流と称せしよし。名の  
 ドウといへるは蛮語露の事なるよし。後に文字を填めて道有《どうう》と認めしとぞ。今  
 の官医栗崎君の祖なるや、また別家の栗崎なるや、詳かなることは知らざるなり。吉田流、  
 檜林流などいへる流儀は和蘭通詞にて、かの方法を学び、一門戸を開きしなり。

一、桂川家の御事は、今の代より五世の祖甫筑先生と申せしは、文廟未だ藩邸におはせし  
 時召し出されし御外科なり。その師家は平戸侯の医師にて、嵐山甫安と申したるよしなり。  
 この甫安はその侯より、出島在館の和蘭外科に御託し置かれて親しく学ばせ給ひしとなり。  
 この御家は、平戸へ入津以来、かの国の人のことは訳品《わけしな》ありて御親しみ御自  
 由なることよし。またその時代は、今の如くにもなかりしにや。甫筑君その頃幼君にて  
 門人となり、師に付添ひて出島へも時々参られしが、専ら嵐山の流法を伝へ給ひしとなり。  
 和蘭の外科はダンネルとアルマンスといふ人ときけり。桂川、もとは大和の国の人にて、  
 森島氏なりしが、嵐山の流を汲むといふ意にて家名を桂川と改め給ふとなり。今の桂川君  
 の御祖父甫三と申せしは、翁若かりし時、常に交厚かりし御大なりしゆゑ、このこと語り  
 給へるを聞き置き侍りぬ。これを世に桂川流と称しぬることなり。

また古来カスバル流といふ外科あり。これは寛永一十年、南部山田浦へ漂流ありし和蘭船の人数の内、江戸へ召し呼ばれたる中に、カスバル某といふ外科あり。三四年留め置かれ、その療法を学ばせられし者もありしが、追々長崎へ御送りのよし。江戸並に長崎にて、正保の頃、このカスバルより伝来の療法ありしを、詳かなる事を知らざれども、後にカスバル流と唱ふることと申すことにや。また別にカスバル姓の外科渡来のこともありしか。この他長崎にて吉雄流などいへるは、その後渡来の蘭人より伝へ得たる療法もありて吉雄流とも申せり。

その諸家の伝書といふものどもを見るに、みな膏薬油薬の法のみにて、委しきことなし。かくの如き類にて、備はらざる事のみなれども、その業は漢土の外科には大いに勝り、また本邦の古へより伝はりたる外治には大いに勝れりといふべきか。そのうちに翁が見たる檜林家の金瘡の書といふものあり。その中に人身中にセイヌンといへるものあり。これは生命にあづかる大切のものなりと記せり。今を以て見れば、これセーニューにして、神経と義訳せしものと思はる。わづかながらこれ程のことを聞寄せしはこの書を初めとすべし。

一、国初より前後、西洋のことにつきてはしかじかのことありて、すべて厳しく御制禁仰せ出されしことゆゑ、渡海御免の和蘭にても、その通用の横行の文字、読み書きのことは御禁止なるにより、通詞の輩もたゞ片仮名書きの書留等までにて、口づから記憶して通弁の御用も工弁せしにて、年月を経たり。さありしことなれば、たゞ一人横行の文字読み習ひたしといふ人もなかりしなりき。しかるに万事その時至れば自ら開け整ふものなるゆゑにや、有徳廟の御時、長崎の和蘭通詞西善三郎、吉雄幸左衛門、今一人何某（名は忘れたり）とかいふ人々申し合せて談ぜしは、これまで通詞の家にて一切の御用向取扱ふに、かの文字といふものを知らず、たゞ暗記の詞のみを以て通弁し、入組みたる数多の御用をかつかつに弁じて勤め居ることは、あまりに手薄き様なり。なにとぞ我々ばかりも横文字を習ひ、かの国の書をも読むべきこと御免許を蒙りなばいかに。さもあらば、以来は万事につけ事情明白にわかり、御用弁よろしかるべきなり。これまでの姿にてはかの国の人に偽り欺かるることありても、これを糾明するの便りもなきことなりと、三人いひ合わせて、この次第を申し立て、なにとぞ御免許なし下されたき旨、公へ願ひ奉りしに、御聞届けられ、至極尤もの願い筋なりとて、速やかに御免を蒙りしとなり。これぞ和蘭渡来ありてのち百年余にして横文字学ぶことの初めなるよしなり。

一、これによりて文字を習い覚ゆること出来、西善三郎ら先づコンストウワールドといふ辞の書を和蘭人より借り得しを、三通りまで写せしよし。和蘭人これを見てその精力に感じ、その書をただちに西氏に与へしよし。かくありしこと等、自然に上間に達しけると見え、和蘭書と申すもの、これまで御覧遊ばされしことなきものなり、何なりとも一本差し出し候やう上意ありしにより、その頃何の書なりしにや、図入の本差し出せしに、御覧遊ばされ、これは図ばかりも至って精密のものなり、このうちの所説を読み得るならば、また必ず委しき要用のことあるべし、江戸にても誰ぞ学び覚えなばしかるべしとのことにて、初めて御医師野呂元丈老、御儒者青木文蔵殿との兩人へ仰せをこうむり候よしなり。それ

よりこの御兩人この学を心がけられたり。しかれども、毎春一度づつ拝礼に来る和蘭人に付添ひ来る通詞どもより、僅かの滞留中聞き給ふこと、殊に繁雜寸暇もなき間のことなれば、しみじみ学び給ふべき様もなし。数年を重ね給ひしことなれども、ようやくソン(日)、マーン(月)、ステルレ(星)、ヘーメル(天)、アールド(地)、メンス(人)、ダラーカ(竜)、ティゲル(虎)、ブロイムボーム(梅)、バムブース(竹)といふ位よりかの二十五字を書き習ひ給へることのみなり。しかれども、これぞ江戸にて和蘭事学び初めし濫觴《らんしよう、初め》なりき。

一、さて、翁が友豊前中津侯の医官前野良沢といへるものあり。この人幼少にして孤となり、その伯父淀侯の医師宮田全沢といふ人に養はれて成り立ちし男なり。

この全沢、博学の人なりしが、天性奇人にて、万事その好むところ常人に異りしにより、その良沢を教育せしところもまた非常なりしとなり。その教へに、人といふ者は、世に廃れんと思ふ芸能は習ひ置きて末々までも絶えざるやうにし、当時人のすててせぬことになりしをばこれをなして、世のために後にその事の残るやうにすべしと教へられしよし。いかさまその教へに違はず、この良沢といへる男も天然の奇士にてありしなり。専ら医業を励み東洞の流法を信じてその業を勤め、遊芸にても、世にすたりし一節切を稽古してその秘曲を極め、またをかしきは、猿若狂言の会ありと聞きて、これも稽古に通ひしこともありたり。かくの如く奇を好む性なりしにより、青木君の門に入りて和蘭の横文字とその一二の国語をも習ひしなり。

後にその著せし蘭訳筈といふものを見るに、それより以前のこととみえしに、同藩の坂江鷗といふ隠士、一日蘭書の残篇を良沢へ見せ、これは読みわけ解すべきものにやといひしに、これを借り受けてつらつら思ふに、国異に言殊なるといへども、同じく人のなすところにしてなすべからざるところのものあらんやと志せしに、さてこれに取り付くべきの便りなきをうらみ居たりしことなり。それよりふと青木先生この学に通じ給ふと聞き、遂にその門に入りてこれを学び、和蘭文字略考などといふ著書を授かり、先生の学び識れるところをば聞き尽せりとなり。

これは青木先生長崎より帰府の後のことと聞ゆ。先生長崎へ行かれしは延享の頃にやと思はる。良沢の入門は宝暦の末、明和の初年、歳四十余の時なりしか、これ医師にて常人の学べるはじめなるべし。

一、しかれどもその頃はわけて常人のみだりに横文字を取扱ふことは遠慮せしことなり。

すでにその頃本草家と呼ばれし後藤梨春といへる男、和蘭事の見聞せしを書き集め、紅毛談という仮名書の小冊を著し、開板(かいはん：木版時代の出版)せしに、その内にかの二十五文字を彫り入れしを、何方よりか咎めを受け、絶板となりたることもあり。

一、またその後山形侯の医師安富寄碩といふ者、麴町に住まひたり。この男長崎に遊学し、かの地にて二十五文字を習ひ且つその文字にていろは四十七文字を綴り合ひしを認め貰ひ

帰り、人に誇りてかの書籍も読み分くるやうにいひ触らせしを、翁なども珍しきことに思ひたり。同藩中川淳庵などは、麴町に町宅してありしが、この男より和蘭文字を初めて習ひしなり。

一、翁、かねて良沢は和蘭事に志ありや否やは知らず、久しきことにて年月は忘れて、明和の初年のことなりしか、ある年の春、恒例の如く拝礼として蘭人江戸へ来りし時、良沢、翁が宅へ訪ひ来れり。

これより何方へ行き給ふと問ひしに、今日は蘭人の客屋に参り、通詞に逢うて和蘭のことを聞き、模様により蘭語なども問ひ尋ねんがためなりといへり。翁、その頃いまだ年若く、客気甚しく、何事もうつり易き頃なれば、願はくばわれも同道し給はれ、ともども尋ね試みたしと申しければ、いと易きことなりとて、同道してかの客屋に罷りたり。

その年大通詞は西善三郎と申す者参りたり。良沢引合せにてしかじかのよし申し述べたるに、善三郎聞きて、それは必ず御無用なり、それは何故となれば、かの辞を習ひて理會するといふは至って難きことなり。たとへば湯水又は酒を呑むといふかを問はんとするに、最初は手真似にて問ふより外の仕方はなし。酒をのむといふことを問はんとするに、先づ茶碗にても持ち添へ注ぐ真似をして口につけて、これはと問へばうなづきて、デリンキと教ゆ。これ即ち呑むことなり。さて、上戸と下戸とを問ふには、手真似にて問ふべき仕方はなし。これは数々呑むと数少く呑むにて差別することなり。されども多く呑みても酒を好まざる人あり、また少く呑みても好む人あり。これは情の上のことなれば、なすべき様なし。

さてその好き嗜むといふことはアーンテレッケンといふなり。わが身通詞の家に生れ、幼よりそのことに馴れ居りながら、その辞の意何の訳といふことを知らず。年五十に及んでこの度の道中にてその意を始めて解し得たり。アーンとはもと向ふといふこと、テレッケンとは引くことなり。その向ひ引くといふは、向ふのものを手前へ引き寄するなり。酒好む上戸といふも、向ふの物を手前へ引きたく思ふなり。即ち好むの意なり。また故郷を思ふもかくいふ。これまた故郷を手元へ引きよせたしと思ふ意あればなり。

かの言語を更に習ひ得んとするには、かやうに面倒なるものにして、わが輩常に和蘭人に朝夕してすら容易に納得し難し。なかなか、江戸などに居られて学ばんと思ひ給ふは叶はざることなり。それゆゑ野呂・青木両先生など、御用にて年々この客館へ相越され、一かたならず御出精なれども、はかばかしく御合点参らぬなり。そこもともにも御無用のかたしかるべしと意見したり。良沢は如何承りしか、翁は性急の生れゆゑその説を尤もと聞き、その如く面倒なることをなし遂ぐる気根はなし、徒らに日月を費すは無益なることと思ひ、敢て学ぶ心はなくして帰りぬ。

一、その頃より世人何となくかの国持渡りのものを奇珍とし、総べてその舶来の珍器の類を好み、少しく好事と聞えし人は、多くも少くも取り衆めて常に愛せざるはなし。ことに故の相良侯当路執政の頃にて、世の中甚だ華美繁花の最中なりしにより、かの舶よりウエールガラス（天気験器）、テルモメートル（寒暖験器）、ドンドルガラス（震雷験器）、ホクトメートル（水液軽重清濁験器）、ドンクルカームルル（暗室写真鏡）、トーフランター

レン（現妖鏡）、ソングラス（観目玉）、ルーブル（呼遠筒）といへるたぐひ種々の器物を年々持ち越し、その余諸種の時計、千里鏡、ならびに硝子細工物の類、あげて数へがたかりしにより、人々その奇巧に甚だ心を動かし、その窮理の微妙なるに感服し、自然と毎春拝礼の蘭人在府中はその客屋に人夥しくあつまるやうになりたり。

いづれの年といふことは忘れしが、明和四五年の間なるべし、一とせ甲此丹はヤン・カランス、外科はバブルといふもの、来りしことあり。このカランスは博学の人、バブルは外科巧者のよしなり。

大通詞吉雄幸左衛門は専らこのバブルを師としたりと。幸左衛門（後、幸作、号は耕牛といへり）外科に巧みなりとてその名高く、西国中国筋の人長崎へ下りその門に入る者至って多し。この年も蘭人に附添ひ来れり。翁、それらのことを伝へ聞きしゆゑ、ただちに幸左衛門が門に入り、その術を学べり。これによりて日々かの客屋へ通ひたり。

一日右のバブル、川原元伯といへる医師の舌疔を診ひて療治し、且つ刺路の術を施せしを見たり。さてさて手に入りたるものなりき。血の飛び出す程を預め考へ、これを受くるの器をよほどに引きはなし置きたるに、飛び進む血丁度その内に入りたりき。これ江戸にて刺絡せしのはじめなり。その頃、翁、年若く、元氣は強し、滞留中は怠慢なく客館へ往來せしに、幸左衛門一珍書を出し示せり。これは去年初めて持ち渡りしヘイステル（人名）のシュルゼイン（外科治術）といふ書なりと。われ深く懇望して境樽二十挺を以て交易したりと語れり。

これを披き見るに、その書説は一字一行も読むこと能はざれども、その諸図を見るに、和漢の書とはその趣き大いに異にして、図の精妙なるを見ても心地開くべき趣きもあり。よりにて暫くその書をかり受け、せめて図ばかりも摸し置くべきと、昼夜写しかかりて、かれ在留中にその業を卒へたり。これによりて或は夜をこめて鶏鳴に及びしこともありき。

一、また、年は忘れて、一春、かの幸左衛門、和蘭附添にて参府せし頃、豊前中津邸にて昌鹿公の御母君御座敷内にて不慮に御脛を折傷し給ひしことあり、貴人のことなれば大騒ぎにて、かれこれ医師を御招きのところ、幸ひに吉雄幸左衛門出府居合せ候ことゆゑ、ただちに御招きありて、御療治仰せ付けられ、御順快あらたり。この時前野良沢、御手医師のことゆゑ、懸合仰せ付けられ、格別懇意となりたり。

これら、蘭学の世に開くべき一つといふべし。その後その主の供にて中津へ行きしかば、侯へ願ひ奉りてかの地（長崎のこと）へ下り、専ら吉雄、檜林等に従ひて百日ばかりも逗留し、昼夜精一に蘭語を習ひ、先に青木先生より学びし類語と題せる書の諸言を本として復習訂正し、なほこれに足し補ひて僅かに七百余言を習ひ得、それよりかの国の字体文章等のことなどもあらまし聞書して持ち帰りしことありたり。この時、少々は蘭書を求めて帰府せり。これ長崎へ外治稽古のためならで、かの書説学ばんとて参りし人のはじめなり。

一、和蘭は医術並びにもろもろの技芸にも精しきことと世にもようやく知れ、人気何となく化せられ来れり。この頃よりも、専ら官医の志ある方々は年々対話といふことを願ひてかの客屋へゆき、療術方薬のことを開き給ひ、また天文家の人と同じくその家業のことを問ひ給へり。当時はその人々の門人なれば同遣し給へることも自由なり。さあるにより、

その方々の門人と唱へ、出入もありたり。

長崎は御常法ありてみだりに旅館への出入はならぬことなるに、江戸はしばらくの間のことなれば、自然と構ひもなき姿なりき。

その頃平賀源内といふ浪人者あり。この男、業は本草家にて生れ得て理にさとく、敏才にしてよく時の人気に叶ひし生れなりき。何れの年なりしか、右にいふカランスといへるカピタン《商館長》参向の時なりしが、ある日、かの客屋に人集まり酒宴ありし時、源内もその座に列なりありしに、カランス戯れに一つの金袋を出し、この口試みに明け給ふべし、あけたる人に参らすべしといへり。その口は智恵の輪にしたるものなり。座客次第に伝へさまさま工夫すれども、誰も開き兼ねたり。遂に末座の源内に至れり。源内これを手に取りしばらく考へ居しが、たちまち口を開き出せり。座客はいふに及ばず、カランスもその才の敏捷なるに感じ、ただちにその袋を源内に与へたり。これよりして甚だ親しみ厚くなり、その後は度々客屋に至り、物産の事を尋ね問へり。

またある日、カランス一つの棋子の如き形のスランガステーンといふ物を出し示せり。源内これを見てその功用を問ひ帰り、翌日別に新たに一箇の物を作り出して持ち行き、カランスに見せたり。カランスこれを見て、これは前日見せ示せし物と同品なりといへり。源内曰く、示さるゝところの品は貴国の物産か、また外国にて求め給へるものかと問ふに、これは印度の地方則意蘭（セイロン）といふところにて求め来れりと答ふ。源内また問うて曰く、その国にては如何なるところに産するものといへば、カランス曰く、その国にて伝ふるところは、この物大蛇頭中より出づる石なりといへり。源内聞きて、それはさようにあるまじ、これは竜骨にて作りし物なるべしといふ。カランス聞きていふ、天地の間に竜といふものはなき物なり、如何にして、その骨にて作るべしやといへり。

こゝに於て、源内己が故郷なる讃州小豆島より出せる大なる竜齒につゞきたる竜骨を出し示して、これ即ち竜骨なり、本草綱目といへる漢土の書に、蛇は皮を換へ、竜は骨を換ふと説けり。今われ示すところのスランガステーンはこの竜骨にて作れる物なりといへり。カランス聞きて大いに驚き、益々その奇才に感じたり。これによりて本草綱目を求め、右の竜骨を坂内より貰ひ得て帰れり。その返礼としてヨンストンス禽獣譜、ドドニュース生植本草、アンボイス貝譜などいへる物産家に益ある書物どもを贈りたり。これらのことも直対話にて弁じたることにはあらず。附添ひたる内通詞部屋附などいへる者にて、その情を通じて弁ぜしことにて、一字一言通知せしことにはあらず。その後源内かの地へ遊歴し、蘭書、蘭器なども求め来り、且つエレキテルといへる奇器を手に入れ帰府し、その機用のことをもようやく工夫して、あまねく人を驚かせり。

一、この風右の如く成り行けども、西洋のことに通じたりといふ人もなかりしが、たゞ何となくこのこと遠慮することもなきやうになりたり。蘭書など所持すること御免といふことはなけれども、まゝ所持する人もある風俗に移り来れり。同藩の医中川淳庵は、本草を厚く好み、和蘭物産の学にも志ありて、田村藍水、同西湖先生などとも同志にて、毎春参向せる和蘭通詞どものかたにも往来せり。明和八年辛卯の春かと覚えたり、かの客屋へ至りてターヘル・アナトミアとカスバリユス・アナトミアといふ身体内景図説の書二本を取



り出し来り、望む人あらば譲るべしといふ者ありとて持ち帰り、翁に見せたり。

もとより一字も読むことはならざれども、臓腑、骨節、これまで見聞するところとは大いに異にして、これ必ず実験して図説したるものと知り、何となく甚だ懇望に思へり。且つわが家《玄白の家》も従来和蘭流の外科と唱ふる身なれば、せめて書筐の中にも備へ置きたきものと思へり。しかれどもその頃は家甚だ寥々しくして、これを求むるに力及びがたかりしにより、わが藩の太夫岡新左衛門といへる人の許に持ち行き、しかじかの次第なればこの蘭書求めたしと告げたり。しかれども力の足らざるは是非なしと語りしかば、新左衛門聞き、それは求め置きて用立つものか、用立つものならば価は上より下し置かるゝやう取計ふべしといへり。その時、翁、それは必ずかうといふ目当とはなけれども、是非ともに用立つものになし、御目にかくべしと答へり。

傍に倉小左衛門（後に青野と改む）といふ男居たりしが、それはなにとぞとのへ遣はさるべし、杉田氏はこれを空しくする人にはあらずと助言したり。これにより、いと心易く願ひも叶ひ望みの如くととのひ得たり。これ翁の蘭書手に入りしはじめなり。

一、さて、つねづね平賀源内などと出会ひし時に語り合ひしは、追々見聞するところ、和蘭実測窮理のことどもは驚き入りしことばかりなり、もしたただちにかの図書を和解《わけ》し見るならば、格別の利益を得ることは必せり。されどもこれまでそこに志を発する人のなきは口惜しきことなり、なにとぞこの道を開くの道はあるまじきや、とても江戸などにては及ばぬことなり、長崎の通詞に託して読み分けさせたきことなり、一書にでもその業成らば大なる国益とも成るべしと、たゞその及びがたきを嘆息せしは、毎度のことなりき。しかれども空しくこれを慨嘆するのみにてありぬ。

一、しかるにこの節不思議にかの国解剖の書手に入りしことなれば、先づその図を実物に照し見たきと思ひしに、実にこの学開くべきの時至りけるにや、この春その書の手に入りしは、不思議とも妙ともいはんか。

そもそも頃は三月三日の夜と覚えたり。時の町奉行 曲淵甲斐守殿の家士 得能万兵衛といふ男より手紙もて知らせ越せしは、明日手医師何某といへる者、千住骨ヶ原にて腑分いたせるよしなり。御望みならばかのかたへ罷り越されよかしといふ文おこしたり。

かねて同僚小杉玄適といふもの、その以前京師の山脇東洋先生の門に遊び、かの地に在りし時、先生の企にて観臓のことありしに、この男、したがひ行きて親しく視たるに、古人説くところ皆空言にて信じ難きことのみなり。上古は九臓と称せり、今五臓六腑の目を分ちたるは後人の杜撰なりなんどいへることの話もありし。その時東洋先生、蔵志といふ著書をも出だし給ひたり。翁、その書をも見し上のことなれば、よき折あらは翁も自ら観臓してよと思ひ居たりし。この時和蘭解剖の書も初めて手に入りしことなれば、照らし視て何れかその実否を試むべしと喜び、一かたならぬ幸の時至れりと彼処へ罷る心にて殊に飛揚せり。

さて、かかる幸を得しことを、独り見るべきことにもあらず、朋友の内にも家業に厚き同志の人々へは知らせ遣はし、同じく視て業事の益には相互になしたきものと思ひ量りて、先づ同僚中川淳庵を初め、某誰と知らせ遣はせし中に、かの良沢へも知らせ越したり。さ

て、良沢は翁よりも齡十ばかりも長じ、われよりも老輩のことにてありしゆゑ、相識にこそあれ、つねづねは往来も稀に、交接うとかりしかど、医事に志篤きは互ひに知り合ひたる仲なれば、この一挙に漏らすべき人にはあらず。先づ早く申し通じたく思ひたれども、さしかかりしこと、且つこの夜も蘭人滞留の折なればかの客足にありけるゆゑ、夜分にはなりぬ。俄かに知らすべき便りもなし、如何せんと存ぜしが、臨時の思ひ付きにて先づ手紙ととのへ、知れる人の許に立寄り、相謀りて本石町の木戸際に居たりし辻駕の者を雇ひ、申し達はせしは、明朝しかじかのことあり、望みあらば早天に浅草三谷町出口の茶屋まで御越しあるべし、翁も此処までまかり越し待ち合はすべしとしたため、置捨にて帰れと持たせ遣はしけり。

一、その翌朝とく支度整へ、彼処に至りしに、良沢参り合ひ、その余の朋友も皆々参会し、出迎へたり。時に良沢一つの蘭書を懐中より出だし、ひらき示して曰く、これはこれターヘル・アナトミアといふ和蘭解剖の書なり、先年長崎へ行きたりし時求め得て帰り、家蔵せしものなりといふ。これを見れば、即ち翁がこの頃手に入りし蘭書と同書同版なり。これ誠に奇遇なりとて、互ひに手をうちて感ぜり。

さて、良沢長崎遊学のうち、かの地にて習ひ得、聞き置きしとてその書をひらき、これはロングとて肺なり、これはハルトとて心なり、マーグといふは胃なり、ミルトと言うは脾なりと指し教へたり。しかれども漢説の図には似るべくもあらざれば、誰もただちに見ざるうちは心中にいかによと思ひしことにてありけり。

一、これより各々打連れ立ちて、骨ヶ原の設け置きし観臓の場へ至れり。腑分のことは、えたの虎松といへるもの、このことに巧者のよしにて、かねて約し置きしよし。この日もその者に刀を下さすべしと定めたるに、その日、その者俄かに病気のよしにて、その祖父なりといふ老屠、齡九十歳なりといへる者、代りとして出でたり。健かなる老者なりき。彼奴は、若きより腑分は度々手につけ、数人を解きたりと語りぬ。その日より前迄の腑分といへるは、えたに任せ、彼が某所をさして肺なりと教へ、これは肝なり、腎なりと。切り分け示せりとなり。それを行き視し人々看過して帰り、われわれはただちに内景を見究めしなどいひしまでのことにてありしとなり。

もとより臓腑にその名の書き記しあるものならねば、屠者の指し示すを視て落着せしこと、その頃までのならひなるよしなり。その日もかの老屠がかれのこれのと指し示し、心、肝、胆、胃の外にその名のなきものをさして、名は知らねども、おのれ若きより数人を手につけ解き分けしに、何れの腹内を見てもこゝにかやうの物あり、かしこにこの物ありと示し見せたり。図によりて考ふれば、後に分明を得し動血脈の二幹また小腎などにてありたり。老屠また曰く、只今まで腑分のたびにその医師がたに品々をさし示したれども、誰一人某は何、此は何々なりしと疑はれ候御方もなかりしといへり。

良沢と相ともに携へ行きし和蘭図に照らし合せ見しに、一つとしてその図にいささか違ふことなき品々なり。古来医經に説きたるところの、肺の六葉両耳、肝の左三葉右四葉などいへる分ちもなく、腸胃の位置形状も大いに古説と異なり。官医岡田養仙老、藤本立泉老などはその頃まで七八度も腑分し給ひしよしなれども、みな千古の説と違ひしゆゑ、毎

度毎度疑惑して不審開けず。その度々異状と見えしものを写し置かれ、つらつら思へば華夷人物違ひありやなど著述せられし書を見たることもありしは、これがためなるべし。

さて、その日の解剖こと終り、とてものことに骨骸の形をも見るべしと、刑場に野ざらしになりし骨どもを拾ひとりて、かずかず見しに、これまた旧説とは相違にして、たゞ和蘭図に差へるところなきに、みな人驚嘆せるのみなり。

その日の刑屍は、五十歳ばかりの老婦にて、大罪を犯せし者のよし。もと京都生れにて、あだ名を青茶婆と呼ばれしものとぞ。

一、帰路は、良沢、淳庵と、翁と、三人同行なり。途中にて語り合ひしは、さてさて今日の実験、一々驚き入る。且つこれまで心付かざるは恥づべきことなり。いやしくも医の業を以て互ひに主君主君に仕ふる身にして、その術の基本とすべき吾人の形態の真形をも知らず、今まで一日一日とこの業を勤め来りしは面目もなき次第なり。なにとぞ、この実験に基づき、大凡にも身体の真理をわきまへて医をなさば、この業を以て天地間に身を立つるの申訳もあるべしと、共々嘆息せり。良沢もげに尤も千万、同情のことなりと感じぬ。

その時、翁、申せしは、何とぞこのターヘル・アナトミアの一部、新たに翻訳せば、身体内外のこと分明を得、今日治療の上の大益あるべし、いかにもして通詞等の手をからず、読み分けたきものなりと語りしに、良沢曰く、予は年来蘭書読み出だしたきの宿願あれど、これに志を同じうするの良友なし。常々これをなげき思ふのみにて日を送れり。各々がたいよいよこれを欲し給はば、われ前の年長崎へもゆき、蘭語も少々は記憶し居れり。それを種としてともども読みかかるべしやといひけるを聞き、それは先づ喜ばしきことなり、同志にて力を致せ給はらば、憤然として志を立て一精出し見申さんと答へたり。良沢これを聞き、悦喜斜めならず。しからば善はいそげといへる俗諺もあり、ただちに明日私宅へ会し給へかし、如何やうにも工夫あるべしと、深く契約して、その日は各々宿所宿所へ別れ帰りたり。

一、その翌日、良沢が宅に集まり、前日のことを語り合ひ、先づ、かのターヘル・アナトミアの書にうち向ひしに、誠に艱難なき船の大海に乗り出だせしが如く、茫洋として寄るべきかたなく、たゞあきれにあきれて居たるまでなり。されども、良沢はかねてよりこのことを心にかけ、長崎までも行き、蘭語並びに章句語釈の問のことも少しは聞き覚え、聞きならひし人といひ、齢も翁などよりは十年の長たりし老輩なれば、これを盟主と定め、先生とも仰ぐこととなしぬ。翁は、いまだ二十五字さえ習はず、不意に思ひ立ちしことなれば、ようやくに文字を覚え、かの諸言をも習ひしことなり。

一、さてこの書を読みはじめに如何やうにして筆を立つべしと談じ合ひしに、とてものはじめより内象のことは知れがたかるべし、この書の最初に仰伏全象の図あり。これは表部外象のことなり。その名処はみな知れたることなれば、その図と説の符号を合せ考ふることは、取付きやすかるべし。図のはじめとはいひ、かたがた先づこれより筆を取り初むべしと定めたり。即ち解体新書形体名目篇これなり。

その頃はデの、ヘットの、またアルス、ウエルケ等の助語の類も、何れが何れやら心に

落付きてわきまへぬことゆえ、少しづつは記憶せし語ありても、前後一向にわからぬことばかりなり。たとへば、眉（ウエイブラウ）といふものは目の上に生じたる毛なりとあるやうなる一句も、彷彿として、長き春の一日には明らめられず、日暮るゝまで考へ詰め、互ひににらみ合ひて、僅か一二寸ばかりの文章、一行も解し得ることならぬことにてありしなり。

また或る日、鼻のところにて、フルヘッヘンドせしものなりとあるに至りしに、この語わからず。これは如何なることにてあるべきと考へ合ひしに、如何ともせんやうなし。その頃ウヲールデングック（釈辞書）といふものなし。ようやく長崎より良沢求め帰りし簡略なる一小冊ありしを見合せたるに、フルヘッヘンドの釈註に、木の枝を断ち去れば、その跡フルヘッヘンドをなし、また庭を掃除すれば、その塵土集まりフルヘッヘンドすといふやうに読み出だせり。これは如何なる意味なるべしと、また例の如くこじつけ考へ合ふに、わきまへかねたり。時に、翁思ふに、本の枝を断りたる跡癒ゆればうずたかくなり、また掃除して塵土集まればこれもうずたかくなり。鼻は面中に在り堆起せるものなれば、フルヘッヘンドは堆（ウヅタカシ）といふことなるべし。しかればこの語は堆と訳しては如何といひければ、各とこれを聞きて、甚だ尤もなり、堆と訳さば正当すべしと決定せり。その時の嬉しさは、何にたとへんかたもなく、連城の玉をも得し心地せり。かくの如きことにて推して訳語を定めり。その数も次第次第に増しゆくこととなり、良沢のすでに覚え居し訳語書留をも増補しけり。

その中にもシンネン（精神）などいへること出でしに至りては、一向に思慮の及びがたきことも多かりし。これらはまた、ゆくゆくは解すべき時も出来ぬべし。先づ符号を付け置くべしとて、丸の内に十文字を引きて記し置きたり。その頃知らざることば、嚮十文字《くつわじゅうもじ》と名づけたり。毎会いろいろに申し合せ、考へ案じでも、解すべからざることあれば、その苦しさの余り、それもまた嚮十文字、嚮十文字と申したりき。しかれども為すべきことはもとより人にあり、成るべきは天にありのたとえの如くなるべしと。かくの如く思ひを勞し、精を研り、辛苦せしこと一ヶ月に六七会なり。その定日は怠りなく、わけもなくして各と相集まり會議して読み合ひしに、実に不味者《くらからざるもの》は心とやらにて、凡そ一年余も過ごしぬれば、訳語もようやく増し、読むにしたがひ自然とかの国の事態も了解する様にて、のちのちはその章句の疎きところは、一日に十行も、その余も、格別の労苦なく解し得るやうにもなりたり。尤も毎春参向の通詞どもへも聞きただせしこともあり。またその間には解屍のこともあり。また獣畜を解きて見合はせしこともたびたびのことなりき。

## 蘭学事始 下之巻

一、この会業怠らずして勤めたりしうち、次第に同臭の人も相加はり寄りつどふことになりしが、各々志すところありて一様ならず。翁は一たびかの国解剖の書を得、ただちに実験し、東西千古の差あることを知りしに驚き心服し、なにとぞこの一事早く知り明らめ、治療の実用にも立て、世の医家の業にも、発明ある種にもなしたく、一日もはやくこの一部を用立つやうになし見たしと志をおこせしことゆゑ、他に望むところもなく、一日会して解するところはその夜翻訳して草稿を立て、それにつきてはその訳述の仕かたを種々様々に考へ直せしこと、四年の間、草稿は十一度まで認めかへて板下に渡すやうになり、遂に解体新書翻訳の業成就したり。

そもそも江戸にてこの学を創業して、腑分といひ古りしことを新たに解体と訳名し、且つ社中にて誰いふともなく蘭学といへる新名を首唱し、わが東方国州、自然と通称となるにも至れり。これ今時のごとく隆盛となるべき最初嚆矢なり。今を以て考ふれば、これまで二百年來、かの外科法は伝はりしなれども、ただちにかの医書を訳するといふことは絶えてなかりしが、この時の創業不可思議にも、凡そ医道の大経大本たる身体内景の書、その新訳の起始となりしは、不用意を以て得るところにして、実に天意とやいふべし。

一、過ぎこしかたをかえりみるに、未だ新書の卒業に至らざるの前に、かくの如く勉励すること兩三年も過ぎしに、ようやくその事体も弁ずるやうになるにしたがひ、次第にさとうきびを囓む《かむ》が如くにて、その甘味に喰ひつき、これにて千古の誤も解け、その筋たしかにわきまへ得しことに至るの楽しく、会集の期日は、前日より夜の明るるを待ちかね、兎女子の祭見にゆく心地せり。さて、都下は浮華の風俗なれば、他の人もこれを聞き伝へ、雷同して社中へ入り来りしものもありたり。その時の人々を思ふに、遂ぐるも遂げざるも、今はみな鬼録上の人のみ多し。嶺春泰、烏山松円といへる男などは、頗る出精せしが、今は則ち亡し。同僚淳庵なども新書上木後なりけれども、五十に満たずして世を早うせり。

そのころ往来せし者にて、今に生き残りしは、翁などよりは、はるか歳下の人なれども、弘前の医官桐山正哲までなり。またその頃この業の着実なるを知れるものは格別、たえて知らざるものは、大いに怪しみ疑ふもの多かりき。さて、集り来りたる者の内にも、その業のはかばかしからず、それと突き留めもなき面倒なることゆゑ、遂に精力尽きはて、または今日の生計に逐はるゝ人はそのしるし見えざるに倦み、且つは已むを得ず中道にして廃するといへる族も多かりき。またはたまたま志厚かりし者も、多病にして事ならず、早世せしもあまたありたり。

最初より会合ありし桂川甫周君は、天性穎敏、逸群の才にてありしゆゑ、かの文辞章句を領解し給ふことも万端人より早く、未だ弱齡とは申せ、社中にても各々末頼もしく芳しとて賞嘆したりき。尤もその家代々和蘭流外科の官医なる上、その父甫三君は青木先生よりアベセ二十五字をはじめ、僅かながらも蘭語なども伝はり給ひしを聞き覚え、少しはその下地もありし故にや、退屈の様子もなく、会ごとには怠りなく出席したまへり。

一、同盟の人々毎会右の如く寄りつどひしことかくありしといへども、各々その志すところ異なり。これ実に人の通情なり。先づ第一の盟主とするところの良沢は、奇異の才ゆゑ、この学を以て終身の業となし、尽くかの言語に通達し、その力を以て西洋の事体を知り、かの群籍何にても読み得たきの大望ゆゑ、その目当とするところ康熙字典などの如きウラールデンブックを解了せんといふことに深く意を用ひたり。それゆゑ世間浮華の人に多く交はることを厭ひたり。

またこの学開くべき天助の一つには、良沢といふ人、天性多病と唱へ、この頃よりは常に閉戸して外へも出でず、またみだりに人にも交はらずたゞこの業を以て楽しみとし、日を消し居れり。その君 昌鹿公はその素志の情合をよくしろしめし、かれは元来異人なりとて深く咎めもし給はず。しかれども本務に怠りがちなりければ、勤め方疎漫なりと上へ告げ奉りし人もありしに、公の曰く、日々の治業をつとめるも勤めなり、またその業のためをなし、終には天下後世生民の有益たることをなさんとするも、とりも直さず、その業を勤むるなり。かれは欲するところありと見ゆれば、そのこのむところに任せ置くべしとて、一向に打ち捨てさし置かれたり。

すでにその前後ポイセン（人名）プラクテーキなどいへる内科書を求められ、その紙端に御印章押し給ひて与へ給ひしこともあり。元来その号を樂山と呼びしが、高年の後、自ら蘭化と称せり。これは昔、君侯より賜はりし名なりと。これは君侯常に良沢は和蘭人の化物なりと御戯れにのたまひしより出でたり。その寵遇かくの如きことにてありたり。これゆゑ、良沢心のまゝにその学の修行出来たることなり。さて、浮華の輩、雷同して従事せしも多かれども、創業の迂遠なるに倦みて廢するもの少からざりしに、この先生、生涯一日のごとく、確乎として動かざりしゆゑ、その中には今の如くその業を遂げしもあることと思はるゝなり。これ全くこのこと開くるの時に遭ひしゆゑにや。

また中川淳庵は、かねて物産の学を好めるゆゑ、何とぞこの業を勤め、海外の物産をも知り明らめたきことを欲せり。また傍ら奇器巧技のことを嗜み、自ら工夫を凝らして新製せるも少からず。和蘭局方を訳しかかりしに、業を卒へず天明の初年かく膈症を患ひて千古の人となれり。

桂川君はさしてこれといふ目当とては見えねども、前にもいへる家柄なれば、たゞ何とはなくこの事をこのみ給ひ、齡は若し、氣根は強し、会毎に來り給ひてこの學に加はり給へり。

翁はこれらとは大いに違ひ、始めて觀臟し和蘭図に徴して千古の差あるに驚き、いかにもして先づこの一事を早くあきらめ、治療の用を助けたく、また、世医諸術發明の間にも用立つやうになしたき志のみなりければ、何とぞ一日も速かにこの一部見るべきものとなしなんと心掛け、この一書の訳をし、そのこと成らば望み足りぬと心を決し、思ひを興せしに依て、深くかの諸言を覚え、他事をなすの望みはなかりしなり。五色の糸の乱れしは皆美なるものなれども、赤とか黄なるとか一色に決し余はみな切り棄つる心にて恩ひ立ち

しなり。

その節思慮するに、応神帝の御時百濟の王仁初めて漢字を伝へ書籍を持ち渡りてより、代々の天子、學生を異朝へ遣はされ、かの書を学ばせ給ひ、数千歳の今に至りてはじめて漢人にも恥ぢざる漢学出来る程になりたるなり。今はじめて唱へ出だせるの業、何として俄かに事整うて成就すべきの道理なし。たゞ人身体の一事、千載説くところの違ひたることを世に示し、何とぞその大体を知らせたく思ひしまでにて、他に望むところなしと一決し、右にもいへる如く、一日会して解せしところをその夜宿に帰りてただちに翻訳し記しため置きたるなり。同社の大人翁が性急なるを時々笑ひしゆゑ、翁答へけるは、凡そ丈夫は草木と共に朽つべきものならず、かたがたは身健かに齡は若し、翁は多病にて歳も長けたり。ゆくゆくこの道大成の時にはとても逢ひがたかるべし。人の死生は預め定めがたし。始めて発するものは人を制し、後れて発するものは人に制せらるといへり。このゆゑに翁は急ぎ申すなり。諸君大成の日は翁は地下の人となりて草葉の蔭に居て見侍るべしと答へければ、桂川君などは大いに笑ひ給ひ、のちのちは翁を渾名して草葉の蔭と呼び給へり。

かかることにて年月は過ぎ行き、白駒の隙過ぐるよりも早く、とかくせし間に三四年の月日を重ね、おひおひ世の人も聞き伝へて尋ね来るもありしゆゑ、西洋説くところの臟腑、経絡、骨節等その既に知るところを以て大凡はその真面目を語り示せるほどにはなりたり。

一、解体新書未だ上木の前なりしが、奥州一ノ関の医官建部清庵（由正）といへる人、はるかに翁が名を聞き伝へて、平生記し置きたる疑問を送りしことあり。その書に記せしことども、わが業に就きては感嘆すること多く、これまで相識れる人にもあらで、翁と志を同じうするも千里一契なり。その書にいふ、これまでの和蘭流外科片仮名書きの伝書をこの術の基とするまでなるは、さてさて残念なり、世に有識の入出でて昔漢土にて仏經を翻訳せしごとくに和蘭の書をも和解なしたらば、正真の和蘭医流成就すべしと記せられたり。これはその時より二十余年前よりの懸念ときこえたり。実にその見解感ずるも余りあり。はからずも翁その人にあたりしを拏躍し、われらの知己千載の一奇遇なりと答書を報じ、それより往復絶えずして書信を通じ、その因縁によりてしかじかのこともあり。門人等その書通を書きあつめ蘭学問答と名づけ留めたり。

後に子弟ら蔵版となしぬ。和蘭医事問答と題せしものはこれなり。

一、翁は元来疎漫にして不学なるゆゑ、かなり蘭説を翻訳しても人のはやく理会し暁解するの益あるやうになすべき力はなし。されども、人に託してはわが本意も通じがたく、やむことなく拙陋《せつろう、下手》をかえりみずして自ら書き綴れり。その中に精密の微義もあるべしと思へるところも、解しがたきところは、疎漏なりと知りながらも、強ひて解せず。たゞ意の達したるところばかりを挙げ置きけるのみなり。

たとへば、京へ上らんと思ふには、東海東山二道あることを知り、西へ西へと行けば、終には京へ上り着くといふところを第一とすべしと、その道筋を教ふるまでなりと思ふと

ころより、そのあらましの大方ばかりを唱へ出だせしなり。これを手初めにして世医の為に翻訳の業を首唱せしなり。もとより浮屠氏翻訳の法はわきまへず、殊に和蘭書翻訳といふことは、古今になきところの最初なれば、この読み初めの時にあたりて、細密なるところはもとより弁ずべきやうもなし。

たゞ幾重にも、医たるもの先づ第一に、臟腑内景諸器の本然官能を知らずしては濟まず。何とぞ各々その実をわきまへて互ひに治療の助けになさばやと思へるが本意ばかりなり。この志ゆゑ、この訳をいそぎて早くその大筋を人の耳にも留まり解し易くして、人々これまで心に得し医道に比較し、速かに曉り得せしめんとするを第一とせり。

それゆゑ、なるたけ漢人称するところの旧名を用ひて訳しあげたく思ひしなれども、これに名づくるものとかれに呼ぶものとは相違のもの多ければ、一定しがたく当惑せり。かれこれ考へ合はすれば、とてもわれより古をなすことなれば、いづれにしても人々のさとり易きを目当として定むる方と決定して、或は翻訳し、或は対訳し、或は直訳、義訳と、さまざまに工夫し、かれに換へ、これに改め、昼夜自ら打ちかかり、右にもいへる如く草稿は十一度、年は四年に満ちて、ようやくその業を遂げたり。

尤もその頃はかの国俗の精密微妙のところは明了すべきことにはあらず、今の如く思ひよらず開けしところより見る人はさぞ誤解のみといふべし。はじめて唱ふる時にあたりては、なかなか後のそしりを恐るゝやうなる様々たる了簡にて企事は出来ぬものなり。くれぐれもかの大体にもとづきて合点の行きしところを訳せしまでなり。梵訳の四十二章経も漸々今の一切経に及べり。これ翁がその頃よりの宿志にして企望せしところなり。世に良沢といふ人なくばこの道開くべからず。且つ翁が如き素意大略の人なくばこの道かく速かには開くべからず。これもまた天助なるべし。

一、さて、右の如く、一通り訳書出来たれども、その頃は蘭説といふこと少しにても聞き及び聞き知れる人絶えてなく、世に公にせし後は、漢説のみ主張する人は、その精粗を弁ぜず、これ胡説《外国の説、間違つた話》なりと驚き怪みて、見る人もなかるべしと思ひ、先づ解体的図といふものを開板して世に示せり。これは俗間にいふ報帖同様のものにてありたり。

この業江戸にて首唱し、二三年も過ぎしころ、年々拝礼に参向する和蘭便りにて長崎にも聞き伝へ、蘭学といふこと江戸にて大いに開けしといふこと、通詞家などには忌み憎みしよし。さもあるべし。如何さま、そのころまでは、かの家々は通弁までのことにて、書物読みて翻訳するなどいふこともなかりし時節にて、冷めしをさむめしといひ、一部一篇とも訳すべきエーンドールといふ語を、一のわかれ二のわかれと和解し、通じ合ひて事済むやうなることにてありしと見えたり。尤も、医説内景などのことに至りては、誰一人知る人なき筈なり。或る一訳士、この約図を見て、ゲールといふものは身体中にはなし、ガルの誤なるべし、ガルは即ち胆なりと不審せしとなり。但し、この前後よりして翁が輩関東にて創業の一挙ありしにより、その根元たる西肥の通詞輩の志をも大いに引き立てしかと知らるゝなり。



一、縮図既に成り、本篇も出版にもなりしかども、前条にいへるごとく、紅毛談さへ絶版となりしほどのことなれば、西洋のことはかりそめにも唱ふことはならぬことにや、しかし、和蘭はその中にも格別なるにや否のところが不明にて、きつとこれは苦しからずといふことも決しがたく、若し私かにこれを公にせば、万一禁令を犯せしと罪蒙るべきも知られず。この一事のみ甚だ恐怖せしところなり。しかれども横文字をそのままに出させるにはあらず、且つ読みて見ればその姿は知れることなり、わが医道発明のためなれば敢て苦しからずと自ら決定し、何れにも翻訳といふことを公にする初めを唱ふべしと、ひそかに覚悟を極めて決断せしことなり。

但し、これはそのことの最初なれば、何とぞこの一部恐れ多くも冥加のため、公儀へ献じ奉りたき志願なりしが、幸ひ同社桂川甫周君の御父甫三君は、前にもいへる如くの御旧友なりければ、この法服に謀りしに、その取扱推挙により御奥より内献し奉りぬ。かく障りもなく事済みしはありがたき御事なりき。また翁が従弟吉村辰碩は京都に住居せり。この人の推挙を以て、時の関白九条家並びに近衛准后内前公及び広橋家へも一部つつ奉りぬ。

(これによりて三家より目出度き古歌を自ら染筆して賜はり、また東坊城家よりは七言絶句の詩を賦して賜はりぬ。)尤も時の大小御老中方へも同じく一部つつ進呈したり。何方とても何の障れることもなく相済みぬ。これらによりて大いにこの挙に於ける安堵をなしたりき。これと和蘭翻訳書公になりぬるはじめなり。

一、翁が初一念には、この学今時の如く盛んになり、かく開くべしとは、かつて思ひよらざりしなり。これわが不才より先見の識乏しきゆゑなるべし。今に於てこれを顧ふに、漢学は章を飾れる文ゆゑ、その開け遅く、蘭学は実事を辞書にそのまま記せしものゆゑ、取り受けはやく、開け早かりしか。また、実は漢学にて人の智見開けし後に出でたることゆゑ、かく速かなりしか、知るべからず。

しかれども、この業の自然に開くべきの気運にや、このころより、前に記せる東奥の建部氏、翁には二十歳ばかりも長じたる翁なるが、不思議に書牘《しょとく》の往復ありしが、わが答書を得て実に狂喜ただならずと申し越せし趣きなれども、身の老朽を如何せんとして、その息亮策をわが門に入れ、続いて、その門人大槻玄沢といふ男をさし登せて同じくわが門に入れたり。

この男(大槻玄沢)の天性を見るに、凡そ物を学ぶこと、実地を踏まざればなすことなく、心に徹底せざることは筆舌に上せず。一体豪気は薄けれども、すべて浮きたることを好まず。和蘭の窮理学には生れ得たる才ある人なり。

翁その人と才とを愛し、務めて誘導し、後にはただちに良沢翁に託してこの業を学ばせしに、果して勉強怠らず、良沢もまたその人を知りて骨方を伝へしゆゑ、程なくかの書を解することの大概をさとれり。その際、同僚淳庵、桂川法眼、また福知山侯などと往来してこの業を講究せり。また大いに志を興し、この上は西遊して長崎に至りただちにかの通詞家に従ひ学び試みたきよしをはかりしゆゑ、われも良沢も喜び許し、汝壯年行ケ矣、勉メヨヤ、そのことを済まさば宿業ますます進むべしと慫慂(しょうよう)せしにより、いよいよ憤起して志を負笈に決したり。しかれどももとより貧生のことなれば力の及ばざる

ことどもなり。翁、その志に感じ、専らその力を助けんと思へども、翁もそのころは生計かたく、思ふほどならねども、力の及べるだけはこれを助け、且つ御同学たりし福知山侯も浅からぬ恩遇ありて、やがてかの地にいたり、本木栄之進といへる通詞家に寄宿し、教へを受け、また彼に問ひ、此に謀り、油断なく修行して帰府したり。爾後は江戸永住の人となることを得たり。

さて、嘗て編集し置ける蘭学階梯といふ書ありしを、帰府の後、蔵版して同志に示せり。この書出でし後、世の志あるもの、これを見て新たに憤排し、志を興せしもまた少からず。この人を生じ、これらの書の出づることとなりしも、翁が本志を天の助け給ふの一つにやと思ひしことなり。

一、この余わが門に出入せしものうち、この業を学びかかりしもの多かりけれども、或は久しく都下に足をとどむることかたく、或は官途につながれ、或は生計に逐はれ、或は病身、或は夭死などと、みなはかばかしく事を遂げしもなかりき。しかれども、翁がこれを発起せしにより、その支派分流を生じ出だせしは少からず。

さて、安永七八年の頃、長崎より荒井庄十部といへる男、平賀源内が許に来れり。これは西善三郎がもとの養子にして政九郎といひて通詞の業をなせし人なり。社中蘭学を興すの最初なれば、翁が宅へ招き淳庵などと共にサーメンスプラーカを習ひしこともありし。源内死せし後、桂川家に寄食し、その業を助け、また福知山侯へも出入して侯の地理学の業にも加功したり。(侯専ら地理学を好み給ひ泰西図説等の訳編あり。) 庄十郎、後は他家に在りて森平右衛門と改名したり。この人江戸へ下りていささか社中を誘発せざりしにもあらざらんか。今は千古の人となれり。

一、津山侯の藩医に宇田川玄随といへる男あり。これは元来漢学に厚く、博覧強記の人なり。この業に志を興し、玄沢によりてかの国書を習ひ、その紹介にて翁と淳庵へも往来し、桂川君、良沢へもようやく交を通じたり。

後に長崎前の通詞家、白河侯の家臣となりし石井恒右衛門といふ人などへも出入し、かの言語の数々をも習ひしが、元来秀才にて鉄根の人ゆゑその業大いに進み、一書を訳し、内科撰要と題せる十八巻を著せり。これ簡約の書といへども、本邦内科書新訳のはじめなり。惜しいかな四十余にして泉路に赴けり。この書没後にいたり、ようやく全部の開板なれり。

一、京師に小石元俊といへる医師あり。独嘯庵の門人にて、医事に志至って厚き男なり。翁もとより相識れる人にあらず。かれはじめて解体新書を読みて千古の説にたがひしところを疑ひ、みづからしばしば観臟してこの書の着実なるに感じ、それ以来深くこれを喜び、翁へ書信を通じて、なおその解しがたきところを尋問せり。天明五年の秋、翁、侯家に陪してその国に罷りし帰路、上京せし時、滞留の間、日夜来りて問難したり。その後は東遊し、玄沢が僑居を主とし、在留一年に近く、つねづね社中とこの業を討論せり。蘭学とはなさざれども、帰京の後その塾に於て出入の諸生徒に解体新書をつねに講じてその実旨を人に示せしと。これ関西の人を誘発せしの一つなり。

一、大坂に橋本宗吉といふ男あり。傘屋の紋かくことを業として老親を養ひ、世を営めりと。不学なれど、生来奇才あるものゆゑ、土地の豪商ども見立てて力を加へ、江戸へ下して玄沢が門に入れたり。僅かの逗留の間出精し、その大体を学び、帰坂の後も自ら勉めてその業大いに進み、後は医師となりて益々この業を唱へ、従遊の人も多く、ようやく訳書をもなし、五畿、七遺、山陽、南海諸道の人を誘導し、今に於けるいよいよ盛んなりと聞けり。江戸へ来りしは寛政の初年のことなり。帰坂の最初、右の元俊も、かれが志を助けてその業を励ましめしとなり。

一、土浦侯の藩士に山村才助といふ一奇士あり。その叔父市川小左衛門を介として、翁に蘭学のことを問ふ。翁、そのころは年老いて、この業を以て悉く門人玄沢に寄託す。故にこの男も同人に入門せしむ。玄沢かの国文二十五字よりして教へ立てたり。天性その才備はり、殊に地（理）学をこのみ、専らその筋を専精せしが、白石先生の采覧異言を増訳重訂して十三巻の書を訳撰す。栗山先生の推挙によりて官へも内献せり。その余、翻訳の内旨も奉じたりしが、その業も全からずして即世せり。惜しむべしといふべし。万国輿地の諸説は未だ漢人の知らざるところのもの多し。これ蘭学のこゝに至れるの初なり。

一、石井恒右衛門は長崎旧の訳官馬田清吉といふものなりしが、その家業を他人へゆづりて江戸へ来り、天明の中頃、白河侯の家臣となれり。侯そのはじめを知り、ドドニュース本草を和解せしめ十数巻の訳説成れり。その業を卒へずしてこれまた異客となれり。稲村某といふ男取り立てしハルマ和解の書は全くこの人の力によれり。この訳書は近来初学稽古の人々考閲の益ありといふ。この人もとの職業を以て仕官すべしとて東下せしにはあらねども、かくの如く隆盛の中へ来りしことゆゑ、専らこの道の助けとなりたり。

一、桂川家のことは前にもいへるごとくなり。甫周君は抜群の俊才ゆゑ、凡そ和蘭のことにもほゞ通じ、その名声四方に走せ、尤も常にその業事の趣きは、公上にも知ろし召されしことなれば、時々西洋筋のことは和解御用も命ぜられし趣きなり。その草稿その家には有るべし。和蘭薬撰、海上備要方などいふ訳説の著書ありと聞けども、未だ成就の書を見ず。年いまだ六十に満たずして、千古の人となり給へり。

一、因州侯の医師稲村三伯といふ男あり。その国に在りて蘭学階梯を見て憤発して江戸へ下り、玄沢が門をたたき、この業を学び、後にかのハルマといふ人著せる言辞の書を石井恒右衛門に依りて訳を受け、十三巻といふ和語解訳の書を編せり。そのはじめ玄沢が石井へ介をなし、原書も借し与へたりと。その初稿は宇田川玄随、岡田甫説といふもの加功して、時々石井が許に往来して成就せりと。訂正の時に至りては、他に力を添へしものありとも聞けり。後、故ありて侯邸を退き、近国海上郡の辺に浪遊し、遂に名を随鷗と改め、京師に在りて専らこの業を唱へしよし。今はこれも古人となれりと聞けり。しかし釈辞の書を企て成せしは初学者のために一功といふべし。

一、今の宇田川玄真、初めは伊勢の安岡氏にて、京都生れの人なり。江戸へ出でて岡田氏を冒し、上にいふ宇田川玄随の漢学の弟子なりしよし。玄随、その才の固密なるを知りて蘭学に引導せんとの意ありて、つねづね玄沢へも噂せしことありしとなり。しかるに玄随、一とせ、侯駕に陪してその国に至りし頃にや、養家を辞し、本姓安岡に復せし時、玄真はじめて師命を含んで玄沢が許に来り、この学を習はんことを請ふ。蘭字の書方までは玄随より習ひ受けしと見えたれば、為に蘭言訳語の一小冊を授けて写さしめ、またかの局方の書を読ましむ。日々往来し、且つ寄食のことを乞ひけれども、そのころ家に支れることありて、暫く同社嶺春泰が許に託す。この頃春泰、疾んで日々に篤し、終に物故せり。ゆゑにこの後、玄沢、甫周君へ謀りて同所へ託して曰く、この男蘭学執心にしてその依るところなきを憂ふ。為にこれを取扱ひ給はらば、ゆくゆく君の業を助くべきものなるをと説く。君たゞちに諾して、これより同家に入塾することになりぬ。その際も玄沢がもとに往来して訳法を問ふことしばしばなり。

もとの男蘭説の實際に心酔していふ、われ他に望むところなし、随意にこの業の修行出来るの師塾ならば何方へも寄宿なしたきといふ宿願なり。それゆゑ桂川家へ託せしことなり。しかるに、そのころ同家は官務と治業と繁多にして、かれが素志を達すること能はざるを玄沢に訴ふることしげしげなり。一日、玄沢、翁にこのことを語る。翁、その頃は次第に専門の療術寸隙なく、素業を勤むべき暇とはなき身となりたり。しかれども翁はもとよりこの道に志深かりければ、なお益々その道を開きたきの志止みがたく、解体新書成就の後も、かのヘイステル外科書の訳文に手をかけ、金瘡瘡瘍の諸篇は草を起して数巻の稿は出来たりしが、その頃たびたびの病にかかりしに、傍人も諫め、これはこの業勤勉の崇りをなすところなれば、しばらく廃すべしといふ。尤も玄沢等もひたすら心志を放散し、偏へに老を養ふべし、不肖といへどもその業われこれに代るべしともいひ、且つは次第に老い行く年なれば、なかなか大業遂ぐべき気根もなく、その後は今に中絶したりけれども、その本志の已みがたく、数年の間見あたりし蘭書の分は大部の物といへども、力の及べる程は費えを厭はず購り求め、相応には蔵書も集まりたり。

この学を事とせんとするもの誰にあれ、その志はありても、書籍に乏しき時は事成らずと思ひ、自ら読むには暇あらずとも、ゆくゆく子弟らはもとより志ある人に借し与へてもこの道開くための裨益たるべしと思ひ、数十巻を蔵したり。さて、同じくは年若くこの道に志篤き人を見出だし、別に一女に妻はし、養子となし、この業を遂げさせ、わが医道の未だ開けずして未だ足らざるところを開きてこれを補綴し、諸氏の疾苦を広濟なしたきものと朝暮心にかけし折なれば、幸ひに玄真あることを喜び、即ちこれを招き、その志を問ひしに、そのいふところ、玄沢が申せしに違はず。

よりて翁が家に迎へ、父子の契を結びたり。玄真もその意を得て深く喜び、わが家の蔵書を自在に取扱い、日夜怠らず学び、黽勉一かたならず、やゝもすれば夜を徹することもあり。その精力のかくなりしゆゑ、進めることもまた速かにして、その功昔日に倍せり。翁が喜びもまた知るべし。しかありけれども、その頃は年弱き時なれば、かれには専精すれどもまた気の移りやすき客氣盛んの最中なれば、身持至つて放蕩となり、しばしば異見をも加へたれども、いよいよ募りてやまざるにより、惜しむべきの才子とは知りたれども、捨て置かば如何なることをや仕出かし、侯家の御名を汚すべきこともあるべしと、老が身

のその心一日も安からず。やむことを得ず離縁して長く交を絶ちたり。

一、これによりて同社も交を通ぜず、かれも頼み少き身となりて甚だ窮厄してありしに、さりながらその好むところの業は廃せざりしを、かの稲村なる者など、ひそかにみつぎせしよしなり。その際稲村等、わが男伯元に内々謀りて、蔵書中内科12部の書を傭して訳せしめなどしてその窮を凌がせしといふこと、後に聞きたり。遂には自新して志を改めたりと聞きたり。またその頃、稲村が企てしハルマ釈辞の書は、かれが加功してその業を助成せりとなり。

一、二三年過ぎて後、宇田川玄随、病によりて物故せり。その嗣子なきを以て弘く養子を求めたり。こゝに於て、稲村氏仲立ちして宇田川の家を継がせたり。前にいへる如く、玄随へはしかじかの縁もあり、その人なかりし後といへども、今亡父となりし人の志を継ぎ、その身も志すところの本意を達せりといふべし。爾後ますます専精して数多の訳説をもなし、医範の提綱といふものを開板し、既に一家のこと成りぬ。その行ひ改まりその志立ちし上にて宇田川姓も継ぎしことなれば、再び翁へも交通をゆるし給はれと、伯元、玄沢等が申すにまかせ、しかる上は長く悪み遠ざくべきにはあらずとて出入を許し、もとの如く相親しみ、玄真、翁に仕ふること師父の如くなれば、翁もまたかれを見ること子の如くするの昔に復せり。

一、玄沢は先にその名はやく成りて、近頃官府よりして新たに御蔵和蘭の書翻訳の台命をこうむりしに至りぬ。昔、翁が輩のかりそめに企てし学業なりしに、今、翁が世にありて顕らかにかかる嚴命をこうむり奉りしは、冥加にもありがたく、翁が宿世の願ひ満足せりといふべし。なにとぞ生民広済のためと思ひ立ちてとりつきがたきこのことに刻苦せし創業の功、終に空しからず。続いて玄真もまた同様の命をこうむり、相ともにこれに従事せることとなれり。仰いで感戴するに堪へざるところなり。尤も、これ他にもあらず、翁が誘導せしわが門の徒弟にしてこの盛挙にあづかれる、老が身の本懐また何をかこれに加へん。翁が高齢を賜はりし天禄もありがたく、当時草葉の蔭と揮名せられしわが身、今もなほ聖代にながらへてその全備を見せしめ給ふこと、限りなきの恩光、旻天の冥感にやあらん。

一、この余、玄沢、玄随、玄真が門より出でし青藍の器もあるよしなれども、翁が子の子の孫彦にして、委しく知るところにあらず。三部の間、諸侯の国々に分処するも多かるべし。

一、昔、長崎にて西幸三郎はマーリンの釈辞書を全部翻訳せんと企てしと聞きしが、手はじめまでにて、事成らずと聞けり。明和安永の頃にや、本木栄之進といふ人、一二の天文曆説の訳書ありとなり。その余は聞くところなし。この人の弟子に志築忠次郎といへる一訳士ありき。性多病にして早くその職を辞し、他へゆづり、本姓中野に復して退隠し、病を以て世人の交通を謝し、ひとり学んで専ら蘭書に耽り、群籍に目をさらし、そのなかの

文科の書を講明したりとなり。文化の初年、吉雄六次郎、馬場千之助などいふ者、その門に入りて、かの属文並びに文章法格等の要を伝へしとなり。

この千之助は今佐十郎（貞由）と改名し、先年臨時の御用にて江戸に召し寄せられしが数年在留し、当時御家人に召し出され、永住の人となり、専ら蘭書和解の御用を勤め、この学を好めるもの、皆その読法を伝ふることとなれり。わが子弟孫子、その教へを受くことなれば、各々その兵法を得て、正訳も成就すべし。さて、忠次郎は本邦和蘭通詞といへる名ありてより前後の一人なるべしとなり。若しこの人退隠せずして在職にてあらば、却ってかくまでには至らざるべきか。これ、或は江戸にてわが社の師友もなくして、推してかの国の書を読み出だせることのはじまりしに、かの人も憤発せるのなすところかとも思はる。これまた昇平日久しく、これらのことも世に開くべきの氣運といふべし。

一、一滴の油これを広き池水の内に点ずれば、散って満池に及ぶとや。さあるが如く、その初め、前野良沢、中川淳庵、翁と三人申し合はせ、かりそめに思ひつきしこと、五十年に近き年月を経て、この学海内に及び、そこかしこと四方に流布し、年毎に訳説の書も出づるやうに聞けり。これは一犬実を吠ゆれば万犬虚を吠ゆるの類にて、その中にはよきもあしきもあるべけれども、それはしばらく申すに及ばず。かくも長命すれば、今の如くに開くことを聞くなりと、一たびは喜び、一たびは驚きぬ。今この業を主張する人、これまでのことを種々の聞き伝へ語り伝へを誤り唱ふるも多しと見ゆれば、あとさきながら覚え居たりし音語をかくは書き捨てぬ。

かへすがへすも翁は殊に喜ぶ。この道開けなば千百年の後々の医家兵術を得て、生民救済の大きな益あるべしと、手足舞踏雀躍に堪へざるところなり。翁、幸ひに天寿を長うしてこの学の開けかかりし初めより自ら知りて今の如くかく隆盛に至りしを見るは、これわが身に備はりし幸ひなりとのみいふべからず。伏して考ふるに、その実は恭く太平の余化より出でしところなり。世に篤好厚志の人ありとも、いづくぞ戦乱干戈の間にしてこれを創建し、この盛挙に及ぶの暇あらんや。恐れ多くも、ことし文化十二年乙亥は、二荒の山の大御神、二百とせの御神忌にあたらせ給ふ。この大御神の天下太平に一統し給ひし御恩沢数ならぬ翁が輩まで加はり被むり奉り、くまぐますみずみまで神徳の日の光照りそへ給ひしおん徳なりと、おそれみかしこみ仰ぎてもなおあまりある御事なり。

〔その卯月これを手録して玄沢大槻氏へ贈りぬ。翁次第に老い疲れぬれば、この後かかる長事記すべしとも覚えぬ。未だ世に在るの絶筆なりと知りて書きつゞけしなり。あとさきなることはよきに訂正し、繕写しなば、わが孫子らにも見せよかし。〕

八十三齡、九幸翁、漫書す。

## 訳者あとがき

「蘭学事始」は大変に有名な作品ですが、実際にどのくらい読まれているのでしょうか。私は読みたいと思いつつ、電子ファイルがないので詳しくは読みなおさず放置していました。

私自身は、古典は原則として電子ファイルで読む習慣にしています。自由にコメントが加えられ、場所はとらず整理も楽だからです。この作品も当然電子ファイルがあっただけなのに、見当たりません。それが今回これに手をつけた理由です。

この作品は実は青空文庫の「作業中」のリストに入っており、2011年9月の段階で未公開状態です。記録はないので勝手な記憶ですが、おそらく数年間同じ状態ではないでしょうか。青空文庫は、厳密な校正を要求しているので仕方がないのでしょうか。

ないものねだりをして無意味なので、とりあえず印刷体の本で読みました。読むのは楽です。何しろ分量が少なく、本文は岩波文庫で60頁です。電子ファイルもつくりました。

あらためて読んで、「こういう作品があって実にありがたい」という気持ちを新たにしました。「解体新書」自体は歴史上の大事件としても、わざわざ読もうとは思いません。しかし、本書のお蔭で解体新書からの44年間の蘭学発展の道筋がよくわかります。それだけでなく、江戸時代の風俗や医学医療の問題も生々しく味わえます。そんな意味で、この作品を残してくれた杉田玄白に感謝し、なるほど文章を書き残すというのは意義が大きいと痛感しました。著者杉田玄白が、オランダの書籍の翻訳出版が法に触れるのではないかとおそれている点に今回はじめて気づきました。今まで気づかなかったのは、そこまで丁寧に読まなかった故です。

本書が名文か否かが議論になっているといいます。しかし「名文か否か」などは些末な問題です。オランダ語の書籍の翻訳という考え方が極端に乏しかった時点、実は禁止されていた面もあり、その禁令がとけて幸運でしたが、はじめてその仕事に挑戦を決断する場面、苦闘する描写が感動的で、杉田玄白という人はかなりの語り上手と感じます。

読んでいるうちに、北越雪譜で味わった現代語訳の楽しさをここでも味わいたいという気持ちになって実行しました。調べると現代語訳はいくつかあるようですが、いずれも入手が容易ではありません。現役で販売はされておらず、すべて古書です。ただし、北越雪譜と違って、図書館でみつきりやすくありがたいと感じました。

### 原典と現代語訳の出版物

原典でみつかったのは、岩波文庫と講談社学芸文庫、それに酒井シズ女史の対訳の原文です。岩波版は原文が60頁に対して、緒方富雄氏の校注がたっぷり63頁あり、さらに年表・タイトルへの考察・大槻玄沢の序文・復刻にさいしての福沢諭吉の序文・記念碑などの記述が加わって、全部で126頁に及び、実に丁寧な解説ぶりに感心しました。緒方先生は学生時代に講義で教わり、英独仏の三カ国語はもちろん、ギリシャ語やラテン語まで詳しく、「すごい物知り」と感心していましたが、本書の解説を拝見してただの物知りを超えて調査も執筆も実に丁寧な点で先生に対する認識を新たにしました。

酒井シズ女史のものは対訳形式で、原文には筆記体の活字を使用し、現代語訳は明朝体と、明確に区別して読みやすい工夫を図っています。対訳の他に、用語の解説といくつかの区切りへの解説が載っています。原文を細かく分けて小見出しをつけている点が特徴で、このやり方は私も真似させていただきました。ただし、剽窃にならないように小見出し自体は自分で工夫しました。

現代語訳ではなくて翻案と言うべき作品二つを述べます。菊池寛のは、青空文庫にあって電子的に読める唯一の作品です。さすがに大文豪の仕事だけあって、読みやすく分量は原作のほぼ半分と少ないのにその面影を見事に伝えています。玄白が良沢の前に出ると気おされる気がする点を強調しているのは、作者の解釈でしょう。

長尾剛氏の作品は一応「現代語訳」と謳っていますが、翻案ないし立派な創作と分類します。菊池作品とは逆に自由に言葉を補い、素晴らしく楽しい読み物で、原作の比較的生真面目な雰囲気完全に打ち破っています。原文の「思出話」ではなくて、実時間に戻して、原文にない会話まで大幅に盛り込み、要するに小説スタイルです。用語も21世紀の日本社会のものを使用した表現ですが、それでも82歳の玄白に合わせて、横町のご隠居のムードなのも愉快です。

分量は電子版がないので正確には評価できませんが、原典より大幅に増えて二倍を超えているのではないのでしょうか。菊池寛作品と同様、優秀な著述家が自由に解釈して叙述したらこういう素晴らしいものができる事例で、菊池版にならって是非「長尾剛著」として欲しいと感じます。

正直なところ、今回の作業全体で、この作品に遭遇したのが自分には最大の収穫と感じます。ところで、この見事な作品がどのくらい読まれているのか推測できません。2004年出版で、すでに品切れか絶版で古書扱いで、私は幸運にも図書館で入手できましたけれど……日本の著作権法の扱いでは、本書が電子化されて青空文庫に載るのに今後100年近くを要するでしょう。著作権というものが何とも不合理で、作品をムダにすると感じます。長尾氏と出版社が話し合って電子公開して下さったら、多数の読者を得られるでしょうに。

#### 蘭学事始との縁

蘭学事始の一部を、1949年に中学1年生の国語の教科書で習いました。「初めての文語文」と国語の先生が述べたのを記憶しています。「小塚原で腑分けをみたりし翌日、良沢が宅に集まり……」と始まる文章で、60年以上前のことを記憶しているのは、教科書の威力です。解体新書の翻訳を開始する部分に、「フルヘッヘンド」という単語が出てきます。鼻と関係して「堆」とか「うずたかし」を意味すると推理するところで、これも記憶に残っていました。もっとも、いろいろな解説によると、この単語は肝腎の解体新書には存在しないのだそうで、著者杉田玄白の記憶違いか、少なくとも翻訳の改訂で消滅したと結論されているようです。

同じ教科書で芥川龍之介の「蜜柑」も習い、こちらは明確な記憶があり、珠玉の名品ですからその後も何度も読み返しました。まったく忘れていたのが、志賀直哉の「かくれんぼう」で、今回リストを調べて思い出しました。でも、志賀直哉は青空文庫では読めません。



菊池寛の「蘭学事始」を読んだ時点は明確な記憶がありませんが、おそらく上記から数年以内でしょう。今回再読して、文学作品の情報の見事さに感心しました。

#### 現代語訳について

電子ファイルをつくったので、それに手を加え、さらに現代語訳して公開することにしました。分量がごく少ないので、北越雪譜に比較すると楽でした。文章だけで、絵をつける工夫もいりません。情報は多いので、コメントを加えようとすると際限がなさそうなので、すぐあきらめました。長尾剛氏の見事な作品を読んで、到底肩は並べられないと諦めた点も、気分を楽にしてくれました。

諏訪邦夫

帝京短期大学

2011年10月

#### 資料

杉田玄白著緒方富雄校注、『蘭学事始』 岩波文庫 550円

酒井 シヅ（著） すらすら読める蘭学事始 講談社（2004/11/13）定価 1,600

長尾 剛（著） 話し言葉で読める「蘭学事始」（PHP文庫）[文庫] 2004 定価 1200

菊池寛 蘭学事始（創作です） 青空文庫で読めます。

追加：2013年3月、名古屋大学医学部の川口真一氏から、本現代語訳に関して至らぬ点や誤記などを数か所指摘して頂きました。特に16ページに著者が「西洋が説く臓腑、経絡、骨節等……」と書いています。原文も「経絡」となっていますが、この単語は西洋医学にはないはずなので、川口氏のサジェスション通り、「末梢神経を指すか」という訳註を加えました。

文書で具体的に指摘下さったことに感謝し、ここに記します。